

未来のために、いま選ぼう。



高梁川流域連携中枢都市圏事業

高梁川流域学校

—— 第4期年次報告書 ——

2019年3月

一般社団法人 高梁川流域学校



はじめに

高梁川流域学校も、第四期を終えようとしています。

備中志塾や高梁川トレイルによる風土ツーリズム開発、町家deクラス、備中で暮らす匠（先人）への聞き書きなどの活動がすでに緒についています。

今期（第四期）では、備中志塾講義録『「吉備」の歴史と伝統文化』と『高梁川トレイルと風土ツーリズム』の出版による報告ができました。

また、備中志塾の卒業生の提案によるジュニア備中志塾が新たに加わり、開催されました。

とくに教室ももたず、不定期でもある活動ばかりですが、徐々にその連携もはかられるようになりました。たとえば、坂本長利氏の一人芝居「土佐源氏」の公演招致（主催）もその成果のひとつにあげられるでしょう。

私どもは、そうした機会を通じて、備中の風土・歴史・文化を再認識しよう、としています。そのなかで、あらためて実感するのは、高梁川流域というほどよいいまとまりです。端的にいうならば、備中は一円という風土。そこには、高梁川の本流だけでなく、支流、さらにその支流が巡っているのです。ほとんどの川の流れが備中の内で完結する、全国でもめずらしい風土、といえます。

そこで、私たちは、代々の暮らしを育み伝えてきました。不幸にして、今期の七月、豪雨による災害も生じましたが、歴史を通じてみると、備中はほどよく暮らしやすいところではあります。そのことを、備中人の末裔（まつえい）である私どもは幸せなこと、としなくてはならないでしょう。

時代は、変わりゆきます。土地も人々も変わりゆきます。そのなかで、変わらないものは何か。高梁川流域学校ではそれを模索もし、それぞれの活動を連携して、「備中人の誇り」を共有して次の世代にもつないでいきたい、と思います。皆さまのいつそうのご理解とご協力をお願いするしだいです。

高梁川流域学校 校長 神崎宣武



神崎 宣武(かんざき のりたけ)

一九四四年、岡山県生まれ。武蔵野美術大学在学中より宮本常一に師事。以後、国内外の民俗調査・研究に従事。国土審議会専門委員、文化審議会委員、公益財団法人伝統文化活性化国民協会理事などを歴任し、現在、旅の文化研究所所長、公益財団法人伊勢文化会議所五十鈴塾塾長、岡山県文化振興審議会委員などをつとめる。岡山県宇佐八幡神社宮司でもある。

近著に、『「おじぎ」の日本文化』（角川ソフィア文庫）、『大和屋物語—大阪ミナミの花街民俗史』（岩波書店）、『聞書き 遊廓成駒屋』（ちくま文庫）、『「うつわ」を食らう—日本人と食事の文化』（吉川弘文館）、『近鉄中興の祖 佐伯勇の生涯』（創元社）、『社をもたない神々』（角川選書）などがある。



高梁川流域学校

目次

ご挨拶

- 2 一般社団法人高梁川流域学校 校長 神崎 宣武
- 4 一般社団法人高梁川流域学校 代表理事 大久保 憲作

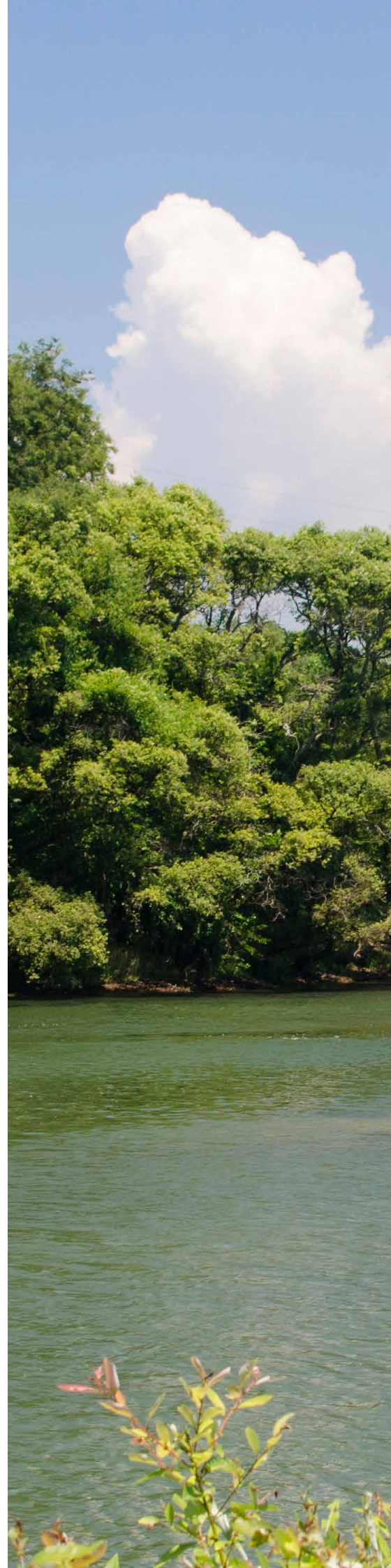
主催事業

- 8 地域循環共生圏構築検討業務
- 10 事業構想塾
- 12 次世代ネットワーク構築事業
- 14 高梁川ミーティング 2019
- 18 備中志塾&ジュニア備中志塾
- 20 高梁フォレストジャンボリー
- 22 SAVE JAPAN プロジェクト
- 24 高梁川マルシェ～流域時間の過ごし方～
- 26 水島コンビナートの進化
- 28 伝統芸能プログラム開発

協力事業

- 30 町家 de クラス 2018
- 31 こども造形ひろば
- 32 第9回高校生によるまちの匠への「聞き書き」～まちの記憶～

- 33 団体紹介
- 45 111人委員会
 - 高梁川流域学校「111人委員会」募集趣意書
 - 寄付金・助成金のお礼
- 47 組織概要



高梁川流域学校について

一般社団法人高梁川流域学校代表理事 大久保憲作

高梁川流域学校の成果と課題

一般社団法人高梁川流域学校が開設されて4年になります。流域各地で素晴らしい活動をしている団体のリーダーが流域学校の理事になり、彼らの団体の事業を、時には学校の中の事業として機能的に連携し実施しています。

団体単独の事業よりも、流域学校の中の事業として行うことで運動の価値を高めています。複数の企業体と全体管理をするホールディングス会社との関係に似ています。地域の課題解決という共通理念において相乗効果が発揮できるのです。

そのような高梁川流域学校の4年間の成果が具体的な形になってきました。

まず流域学校の神崎宣武校長が著された、備中志塾講義録『吉備』の歴史と伝統文化(吉備人出版)は備中人のための教材本です。備中志塾は流域学校の主催事業、神崎塾長の平易な語り口による講義は毎回大人気です。その講義を本で学習できるようにになりました。

次に「高梁川トレイル読本」(一般社団法人水辺のユニオンとの連携事業)が完成しています。松山城、鬼ノ城、倉敷川周辺のトレイル、成羽から吹屋へ、ついで笠岡から美星へ、二つの「とと道」など五つの流域を歩く小道を地図化しました。

また高校生による地域の方々への「聞き書き」をまとめた冊子(備中「聞き書き」実行委員会との連携事業)は備中人の知恵や地域文化に触れられる素晴らしい教材です。

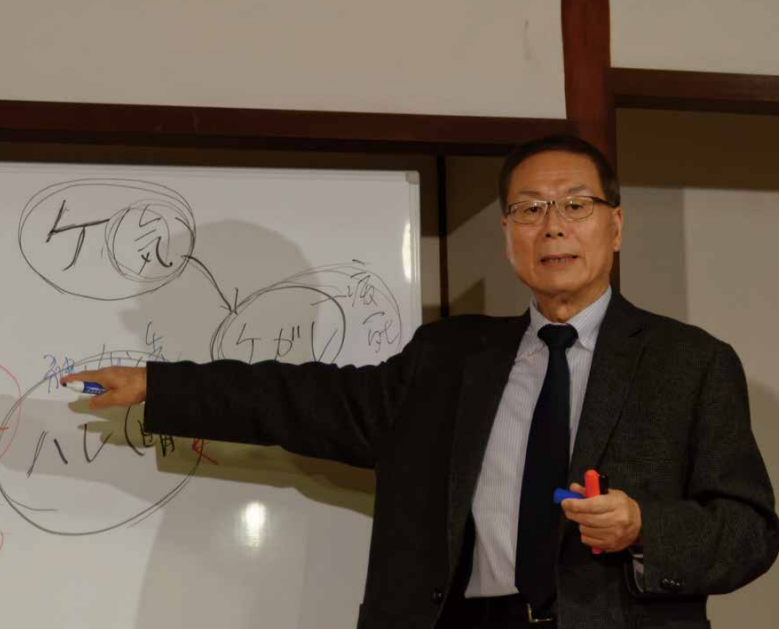
高梁川流域連盟と協力した「高梁川流域マップ」も神崎校長がすべて監修され、4年間でとても充

実してきました。高梁川流域連盟のホームページにある高梁川流域マップ上に、風土記・自然・行事・史跡・偉人賢人・芸能などを項目ごとにプロットし、画像や動画のついた解説文を読む事が出来ます。全国誰もが学習できる教材です。今回数ある成果物より、一例を紹介しました。

課題もたくさんあります。最大の課題は運営資金の調達です。自治体等の補助金には限りがある為、今後は地域企業にひと肌脱いで頂きたいのです。

パラダイムが激変する時代にいかに企業がステークホルダーに好評価され、持続可能性が高まるか。業態変革の一環で、自社の職域に社会の課題解決というカテゴリを置き、そこにコストではなく社会的投資として、新しい経済価値が創造できる事業にチャレンジして欲しいのです。それが実現された時その企業の持続可能性は飛躍的に高まるでしょう。そのような企業と協働し共に学習したいのです。これが企業におけるSDGsへの係わり方だと思いません。

平成から新しい時代が変わる今、企業戦略の変革にパブリックな視点(公益資本主義)が期待されています。



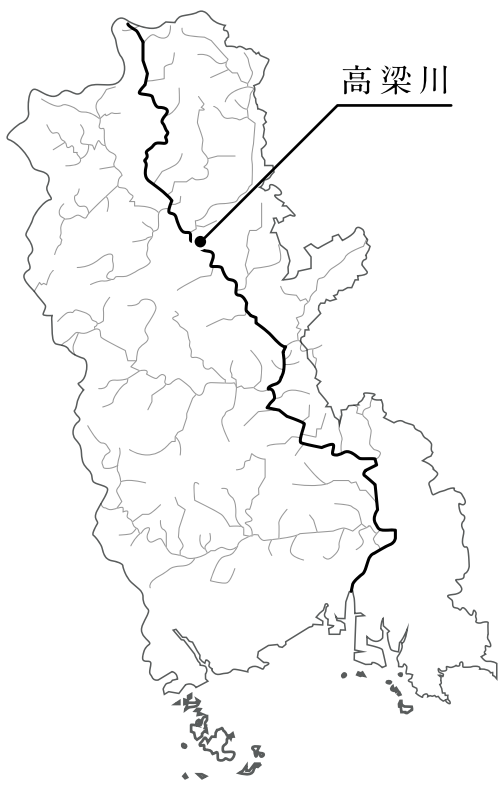
風土を
学び
次世代に
繋ぐ

未来を
創る
仕事を
興す

先人に
学び
匠に習う

節季を
感じ
旬を
味わう

自然を
楽しみ
多様性を
知る



高梁川流域圏

- 新見市
- 高梁市
- 総社市
- 早島町
- 倉敷市
- 矢掛町
- 井原市
- 浅口市
- 里庄町
- 笠岡市

高梁川流域学校は、大学・企業・地域団体・自治体などと連携し、流域の自然や歴史・文化、及び産業を「地域教育」の教材として、持続的に提供することを目的としています。

これらの活動により、「学校教育」「家庭教育」を補完し、若い世代の郷土愛・地域への誇りを醸成するとともに、さらに自治体や企業の人材育成研修を実施し、将来は、風土ツーリズムとしての地域観光プログラムの事業化を目指しています。

高梁川流域学校について

持続可能な開発目標 (SDGs)とは

- 1 2015年9月、国連総会で採択
- 2 2030年の世界目標
- 3 17のゴールと169のターゲットで構成
- 4 貧困や教育、気候変動などの幅広い課題が網羅されている
- 5 先進国も途上国も、すべての国が関わり「誰ひとり取り残さない」

国際社会は、MDGsを開発分野の羅針盤として、15年間で一定の成果を上げました。一方で、教育、母子保健、衛生といった未達成の目標や、サハラ以南のアフリカなど一部地域での目標達成の遅れといった課題が残されました。また、深刻さを増す環境汚染や気候変動への対策、頻発する自然災害への対応といった新たな課題が生じたほか、民間企業やNGOなどの開発に関わる主体の多様化など、MDGsの策定時から、開発をめぐる国際的な環境は大きく変化しました。

2030アジェンダは、こうした状況に取り組むべく、相互に密接に関連した17の目標と169のターゲットから成る「持続可能な開発目標 (SDGs)」を掲げています。



高梁川流域学校の取り組みとSDGsとの関係

「自然を楽しみ多様性を知る」



「節季を感じ旬を味わう」



「先人に学び匠に習う」



「未来を創る仕事を興す」



「風土を学び次世代に繋ぐ」



■ 各主催・連携事業との関係

	事業構想塾(主催事業)
	次世代ネットワーク構築事業(主催事業)
	高梁川ミーティング2019(主催事業)
	備中志塾&ジュニア備中志塾(主催事業)
	高梁フォレストジャンボリー(主催事業)
	SAVE JAPANプロジェクト(主催事業)
	高梁川マルシェ〜流域時間の過ごし方〜(主催事業)
	水島コンビナートの進化(主催事業)
	伝統芸能プログラム開発(主催事業)
	町家deクラス(協力事業)
	こども造形ひろば(協力事業)
	高校生によるまちの匠への「聞き書き」〜まちの記憶〜(協力事業)

高梁川流域学校 事業紹介

地域循環共生圏構築検討業務



地域循環共生圏構築検討業務は、環境省の補助金事業で2016～2018年度までの3か年度、全国10地域の自治体、団体が「多様な主体によるプラットフォームづくり」、「自立のための経済的仕組みづくり」、「人材育成」の活動を実施するとともに、森里川海が生み出す恵みの経済的な評価を行ってその効果を検証し、「地域循環共生圏」の構築に向けた具体的な方策の検討を行うものであった。地域循環共生圏構築を目指す背景は、左記の通りである。

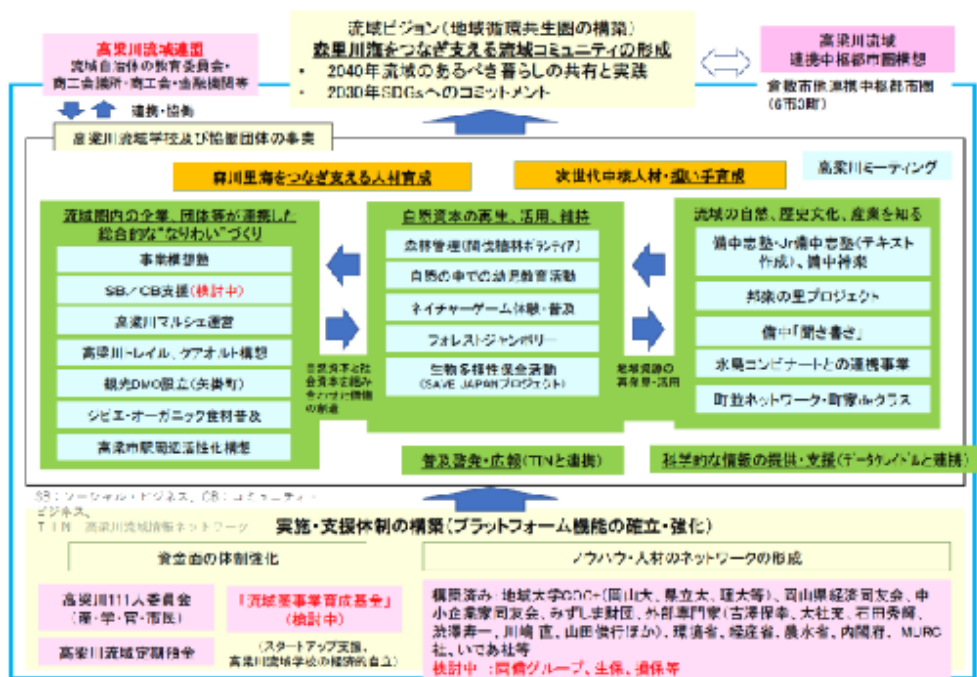


2015年「気候変動に関する国際連合枠組み条約第21回締約国会議」(COP21)で採択された2020年以降の地球温暖化対策の国際的枠組みを定めた協定「パリ協定」では、産業革命前からの気温上昇を2度より低く抑え、1.5度未満を努力目標とすることが掲げられている。また、環境省第5次環境基本計画では、「健全な物質・生命の循環を実現するとともに地域間の共生を図り低炭素を実現する持続可能な社会づくり」を趣旨とし、「地域循環共生圏の創出による持続可能な地域づくり」をテーマとされた。地域循環共生圏とは「各地域が特性を生かし、資源循環する自立・分散型の社会を形成しつつ近隣地域と共生し、広域的なネットワークで地域資源を補完して支え合う」とこと定義。地域循環共生圏が環境・経済・社会が統合的に向上した持続可能な地域を実現するとしている。

高梁川流域学校も本事業に採択され、高梁川流域圏における地域循環共生圏構築に向けて取り組みを行ってきたが、最終年度となる本年度は、「人材育成」に集中して、以下のとおり事業を行った。各事業の詳細は後述するが、人材育成を目的として、3つの事業を密接に関連付けながら実施した。

- ・事業構想塾
- ・次世代人材育成ネットワーク事業
- ・高梁川ミーティング

今年度事業に入る前に、本学のプログラムと関係する事業、団体などの目的関連図を下記のとおり整理した。



主権事業 「地域循環共生圏構築検討業務」

事業構想塾

ビジネスモデルキャンパス

KP (キーパートナー)	KA (キーアクティビティ)	VP (提供価値)	CR (顧客との関係)	CS (顧客セグメント)
	KR (キーリソース)		CH (チャネル)	
CS (コスト構造)			RS (収益の流れ)	

地域の自然・社会資本を活用して、流域内に事業を構想し実施まで行う

事業構想塾は、平成29年度から事業構想大学院大学の講師を招聘して、地域の自然・社会資本を活用して、流域内に事業を構想し実施まで行うことを目的とした実践的なプログラムである。2年目となる本年度は、同じく事業構想大学院大学客員教授、NPO法人グローバルキャンパス理事長の大山充氏に講師を依頼して、全5回で事業を実施した。今年度は、あらかじめ事業計画(案)があり、計画を詰めていく段階にある5つの案件から講義をスタートした。同時に、高梁市、矢掛町などへの地域視察を行い、流域資源活用の方角について意見交換をおこなった。

講義内容は、メンバーが各自の「事業構想」の再構築を図ることを前提として、以下のような内容で講義を進めることとした。

(1)「ビジネスモデルキャンパス」のフレームワークを使用し、事業全体をまとめる。
(2)Facebookのグループ機能を使用して情報交換を行う。

(3)既存の活動(Myプロジェクト)に流域の活動(Myプロジェクト)を付加する。

事業の道筋がイメージできるようにする。
ポイントとして、「流域連携のメリット」を明確化し、「次世代にとつての『流域連携』とは?」「自然資本が共有財産だったが現代の社会資本とは?」という問いをもつて、事業の組み立てを行うこととした。

具体的な講義内容は、以下の通りである。

- 第0回 平成30年7月24日(月) 13:00~17:00
事前確認、事業目的、スケジュールの確認
- 第1回 平成30年8月24日(金) 16:00~19:00
目的確認、受講者背景のヒアリング
(なぜ事業に取り組んでいるのか、事業に至る動機確認)
- 第2回 平成30年9月13日(木) 13:00~17:00
14日(金) 9:00~12:00

高梁市(高梁商工会議所藤岡会頭と面談)JR高梁駅周辺活用について

矢掛町(株式会社やかげ屋繁森良二専務と面談)DMO立上げについて

■第3回平成30年10月31日(水) 14:00~17:00
11月1日(木) 10:00~12:00

「ビジネスモデルキャンパス」のフレームワークを活用して、事業のポイントを整理し、事業計画の精緻化を行った

■第4回平成30年11月29日(木) 11月30日(金)

「ビジネスモデルキャンパス」のフレームワークを活用して、事業のポイントを整理し、事業計画の精緻化を行った

■第5回平成30年1月28日(月) 13:00~15:00
事業計画の発表・評価

結果として、以下のとおり、5つの事業の内、3つの事業計画が最終的にまとまった。

●「高梁川ブランドのオーガニックライフスタイル」事業

健康で自然とのつながりを感じる「オーガニックなライフスタイル」をデザインすることをコンセプトとして、衣食住、観光、レジャーに関わるコミュニティ誌の発行やM&Bを活用した物販を行う。

●「ミライのおとな塾」事業

中学・高校・大学生を対象とした「大人」になるための知識・教養塾。原則6か月の受講で、基礎: 思考法、人柄、仕事、哲学 応用: 歴史、科学、政治、経済、文化、国際情勢を学ぶ有料講座を行う。

●「年3回の収穫のある健康野菜の6次産業化」事業
抗アレルギー効果のある野菜の生産、加工、販売までを行う。既に開発されている商品のリブランドディングを行い、新たなブランドでの販売を開始する。



「年3回の収穫のある健康野菜の6次産業化」事業

事業構想塾で、学んだビジネスモデルキャンパスは、自分の事業アイデアを実現していくための価値、資源、協力者、ターゲット、コストなどを把握する上で、非常にためになる手法であった。平成26年より当社で、地域振興ポイントの事業を展開する中、県内各地の皆さまと繋がりが出来、その地域の課題やユニークな素材を知ることとなった。平成30年に私が代表に就任し、「地域の素材を繋いで新しい価値を生み出す」という企業理念のもと、私らしい新規事業を打ち立てて行こうと思っていたところで、青山先生、大社先生からご指導を受けられたことは、大変有難い機会であった。地域のつながりの中で、偶然にも出会ったチシャトウという野菜。この野菜は、岡山大学薬学部の先生によって研究され、ヒトへの臨床試験ののち、野菜でありながら抗アレルギー作用の特許を取得されている。年3回収穫でき、あらゆる土壌で栽培できるこの野菜を、私は岡山県の新しい特産品にしていきたい。そして、空き家や耕作放棄地との就農を希望する若手移住希望者をマッチングし、人口減少に歯止めをかける起爆剤にしていきたいと考えている。また、アレルギーで給食を食べられない子どもたちにも減らしていきたい。事業構想塾で学んだ事業計画の手法を用いながら、会社としてはチシャトウ加工製品を開発しつつ、その原材料となるチシャトウという野菜の生産農家・生産量を増やし、高梁川流域の人口減少、少子高齢化、被災復興などの諸問題を解決する有効な素材として普及させていきたい。

株式会社リJOIN
代表取締役 上西浩一



「ミライのおとな塾」事業

ミライのおとな塾は、中学生以上の年代の若者が「社会に出るための知恵と教養を学ぶ」学塾 誠和学舎の運営事業である。思考法、哲学、歴史、国際情勢など全10科目を、個別・グループでの議論を通して、1か月ごとに学んでいく。また月初めの回では、専門家を招き、公開講座を開催。予備知識をもとに、議論を重ね、学校では深く学べないが、社会に出るまでに必要な教養を身に付けるべく、活動している。入塾生は、中学生から新卒一年目の社会人までと幅広く、活動の内容もグループディスカッションから読書会、他団体のイベント参加、フィールドワークまで多様な学び方を提案している。開講から入塾していた学生も、大学を卒業し地元に戻り、当塾で培った知見を活かしながら、良き市民として社会で活躍している。

学塾 誠和学舎
塾長 高山 和成

主催事業 「地域循環共生圏構築検討業務」

次世代人材ネットワーク構築事業



新しい価値観をもった「なりわい」の連携で、
高梁川流域の豊かな生き方の実践を。

△概要▽

本事業では、高梁川流域で活動する20代～40代の5名を、本年度の「次世代人材」として位置付け、5名それぞれがチームを組成し、地域における具体的な取組を行う中で、次世代の高梁川流域を支える人物像及び高梁川流域学校が果たすべき役割について検討を行った。その結果を2019年2月23日に開催された高梁川ミーティングの「トークセッション」において報告し、有識者のコメントともあわせて、参加者とともに、更に検討を深めた。

△次世代人材の視点による、今後の高梁川流域における次世代人材の人物像について▽
岡隆平氏の場合

次世代人材の人物像キーワード「学び直し」
自らは、大学生2回目、学び直しをしている。

学び直しの場では、上は60代。起業を目指したり、フリーランス、いろんな人がいる。自らが学び直しのために行動することで、変わった人、新しい人に出会える。定型型の生き方、双六では、世界が小さい。考えられないような人に出会って、世界が広がる。

岡崎遼太郎氏の場合

次世代人材の人物像キーワード「フツウ」
イノベーションを求めることもあるが、変わらないものもある。

日常を過ごすこと。ちよつとした変化を察知できる生き方。これが新しい生き方なのではないかと思っている。いまだに両親はわかっていないかもしれない。

当たり前の日常を繰り返すことが、誰かのために役に立てばよい。

高山和成氏の場合

次世代人材の人物像キーワード「こちゃまぜの教育環境」
いろんな人が、ひとつの場所で学んでいるような環境が新しいと考えている。学年で分けることが主流ではない学び方があるのではないかと分けるから、混ぜるへ。

そういった環境で育まれた人材が、次世代として新しい生き方を実践できるのではないかと考えている。

松田礼平氏、佐伯佳和氏の場合

次世代人材の人物像 キーワード「できるよくなる環境がある」

自分も、新見市に移住して林業を生業として生活していくことに、悩んだ時期があるが、後押ししてくれる人がいたし、叱ってくれたりもした。その時すぐにはわからなかったが、今となつてみれば、愛情を感じる。そういった人間関係も含めて、自らの活動の場を持っていることが大切だと感じている。

坂ノ上博史氏の場合

次世代人材の人物像キーワード「懐かしい未来」

大正15年建築の古民家を日常のオフィスとして活動していると、その丁寧な設えに驚くことがある。そういった環境が生産性や創造性を高めるとユーザーである松原龍之氏からもコメントがあった。高梁川流域学校の理事である中村泰典氏が「SDGsのゴールが達成された姿のひとつが、倉敷の町にはある」と表現することに、深く共感する。地域の文化・風土に根差した生き方が、高度経済成長期以降の日本では忘れられている。テクノロジーを適正に用いながら、取り戻したい。

■この事業の成果と課題

【成果】

本年度、初めて実施した本事業では、5名の次世代人材を選定し、それらの実際の取組みを丁寧
に追いかけることで、高梁川流域における「次世代
人材」の姿が浮き彫りになってきた。

また、「高梁川ミートイング」において、活動発表
を行うことを共通の目標に設定したことで、5名そ
れぞれが意欲的に取組みができたのではないだろ
うか。高梁川ミートイングでの発表に対して、講師・
アドバイザーの先生方から、「高梁川流域での生業、
生き方が感動的であった」「勇気づけられた」などの
コメントを得られたことも、良かったと思う。

波及的な効果として、次世代人材5名が、それ
ぞれ連携を深めたことも、評価できると考えられる。
20代〜40代の年代を越えたメンバーが選定され
たことが効果的に機能して、交流が促進された。

【特に本事業に関連したSDGs 17のゴール】

目標4 質の高い教育をみんなに(岡氏、高山氏、
岡崎氏の取組み)

目標8 働きがいも経済成長も(坂ノ上氏の取組み)

目標15 陸の豊かさを守ろう(佐伯氏の取組み)

【課題】

選定された5名の人材が、全員男性であったこと
から、女性の視点が兼ねていたように思われる。S
D G sの目標にもジェンダーに関わる項目(S D G
s 目標5)があり、今後は、地域の取組みにおい
ても、女性の参加及び平等なリーダーシップが欠か
せないと考える。

また、今後、消費と生産のライフサイクル(S D
G s 目標12)において、地域で活動・活躍する「次世
代人材」の価値と役割を、しっかりと位置付ける
ことが求められると考える。

<次世代人材5名のプロフィールと取組みテーマ>



岡 隆平

「ジュニア備中志塾の今後のあり方について」
倉敷市出身・倉敷市在住。35歳。備中志塾 塾生。ジュニア備中志塾 世話人。
高梁川流域学校の主催事業である、神崎宣武氏が講師を務める連続講座「備中
志塾」に参加して、感銘を受け、歴史・文化・風土を後進に伝えるべく、2018
年度に「ジュニア版備中志塾」を立ち上げ、自らプロジェクトリーダーとして取り組む。



岡隆平氏が取り組む「ジュニア備中志塾2018」の様子



岡崎 遼太郎

「なぜ、ぼくがフリーペーパーをつくったのか」
高知県出身・倉敷市在住。30歳。
LAID-BACK DESIGN 代表・デザイナー、倉敷芸術科学大学非常勤講師
倉敷芸術科学大学を卒業後、同じ大学の仲間や後輩とともにデザイングループを
立ち上げ、高梁川流域のプロジェクトにも多数関わる。2015年から学生とともにフ
リーペーパー「STAR* (スター)」を発刊し、2019年2月現在、13号を数える。



岡崎遼太郎氏が取り組むフリーペーパー「STAR*」の取材・編集など活動風景

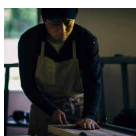


高山 和成

「教育関係事業者として、真備町の復興に関わって」
総社市出身・総社市在住。28歳。
学塾 誠和学舎 塾長、NPO法人 総社商店街筋の古民家を活用する会 副理事
長、総社市教育支援センター「ひきこもり予防対策事業」担当 派遣登校支援員、
岡山次世代スクール協会 事務局・総社支部長
6歳で総社に移住して以降、自称「総社を5日間以上離れたことがない男」として、
総社市を拠点に積極的に活動。2015年に学塾 誠和学舎を設立。2017年からは、
総社市教育支援センターで派遣登校支援員として、市内の小中学校の不登校児童
生徒の支援も行っている。



高山和成氏らが、真備町で高校生たちと展開した支援活動の様相



佐伯 佳和

「流域連携によるものづくりの実際を通して」
今治市出身・新見市在住。28歳。
元新見市地域おこし協力隊。一般社団法人杜守に所属。
新見市地域おこし協力隊にて、3年間の任期中、林業に従事する。2017年度末
で協力隊を卒業した後は、同じく新見市地域おこし協力隊を卒業した松田礼平氏
と、林業を生業とする地元民が設立した一般社団法人に所属して、家具づくりな
どの林業に従事する。



松田礼平氏(右)と佐伯佳和氏(左)。拠点とする新見市の廃校を活用したセンターにて。



坂ノ上 博史

「信頼とつながりによる、仕組みづくり」
倉敷市出身・倉敷市在住。41歳。
一般社団法人高梁川プレゼンターレ 代表理事。サテライトオフィス&コワーキン
グスペース住吉町の家 分福 大家。一般社団法人高梁川流域学 理事。
大学在学中より事業協同組合の設立に関わり、インキュベーション・マネジャー、経営
コンサルティング会社取締役を経て、2010年に独立。2016年に一般社団法人高梁川
プレゼンターレを設立。2018年にサテライトオフィス&コワーキングスペース 住吉町
の家 分福を開設。水島航空宇宙産業クラスター研究会(MASC) 事務局長を兼任。

主催事業 「地域循環共生圏構築検討業務」

高梁川ミーティング2019



高梁川ミーティング2019 地域で生きる新しい生き方と仕組みづくり

1. 高梁川ミーティング2019では、地域の中のみさまざまなステークホルダーの輪を広げることを目的とし、これまで流域学校の様々なプログラム(備中志塾など)に参加を頂いた方々、二人委員会メンバー、特に流域で新しいなりわい、生き方を模索・実践している若者たちを掘り起し、出合い、互いに学び協力し合い、そのネットワークを広げる場づくりを行うこととした。

2. 高梁川流域学校設立4年目の総括と、地域循環共生圏構築検討業務に関わる成果を踏まえて、講演、トークセッションやグループワークを通して、参加者との合意を形成して、今後の高梁川流域学校の活動方向を宣言という形で発信することを目標とする。

3. 特に、地域循環共生圏構築検討業務において実施した「次世代人材育成構築」事業に参加した流域で新しい生き方を実践している若者とのトークセッションを通じて、高梁川ミーティングの場での成果を発表し、流域圏における人材育成の方向についても検討することとした。

4. 日本人が本来持っている精神性とそれを育ててきた米づくりや地域の祭りなどの風土、コミュニティづくりなどの根源的で実践的な学びも意識し、Society 5.0社会、生命文明社会の形成に向けて、忘れてはならない根本的な議論を落さないこととした。

5. 当日の高梁川ミーティング2019宣言文の中で、高梁川流域学校の次年度以降の活動として、「高梁川ミーティング」を中心に、流域人材のネットワークを構築し広げることを目的に、流域のエリアミーティングを行っていく。その活動の中で、流域圏の交流や相互連携が促進し、自立拡散する相互連携によって、持続可能な発展をもたらす様々なビジネスを生み出す風土を醸成してい

くことについて、参加者と方向性一致させることを目標とした。

【開会挨拶】13：00～13：05
神崎宣武校長の挨拶

【第一部】13：05～13：35

■基調講演Ⅰ

中井環境総合政策統括官からは、第5次環境基本計画の考え方を説明頂き、環境省地域循環共生圏構築の中で、人材育成に焦点を当てて頂き、「環境」「社会」「経済」の3つの課題の同時解決に取り組まざるを得ない現状と、これからの地域には、どのような考え方で行動していく人材が必要であるか、その方向性を示して頂いた。脱炭素社会を実現するために環境省だけでなく、我が国全体で取り組む方向を明確に示して頂いた。

■基調講演Ⅱ 13：35～14：05

澁澤寿一先生からは、「地域で生きる新しい生き方と仕組みづくり」をテーマに講演を頂いた。「お金」をめぐって暴走する資本主義の中で、システム化されてしまった生き方しか選べない状況(しかも社会システムは崩壊)に不安を感じている若い世代が、自然や人、地域との関係性を喪失する「無縁社会」になっている。今、これらの関係性を紡ぎ直し、互いに関心と共感を持ち合う社会に向けての行動が必要である。「お金」に依らず、「買う」から「つくる」暮らしへの転換を発想してみること。30年以上地域づくりの現場をみてみると地域で発想した取組みは失敗していない。成功している。しかしながら、楽にお金を稼げる都市部の仕事に後継者がシフトしてしまったことに地域の高齢化や過疎の現状となっている。とこ



るが、現在豊森なりわい塾、真庭なりわい塾などでは、人生と社会を見つめ、お金だけではない価値観を持ち、新しい働き方を模索する世代が生まれている。地域の後継者を育成するその実践的な学びを行っている。

■トークセッション 14：05～15：35

坂ノ上博史理事(高梁川流域学校)をファシリテーターに、中井総合環境政策統括官、澁澤寿一先生、川嶋直先生をコメンテーターとして、高梁川流域で、新しい生き方と模索・実践している若者に、「教育・共育(教育)」「まち・さとづくり(環境)」「なりわい(経済)」について、話題提供し、それぞれが今考えていることなどを検討することとした。

その話題と話題に対するコメンテーターからコメントを通して、「地域での新しい生き方」、その生き方を持続的に支え発展させる仕組みづくりについて、何かしらのヒントを得るまでを行う。「若者」「つなぐ」「ライフスタイル」などがキーワード。

実践例を話題提供する若者は、以下の4名。

- 「教育・共育(教育)」高山一成さん(学塾誠和学舎塾長)
- 「まち・さとづくり(環境)」岡隆平さん(丸三化学工業株式会社代表取締役社長)
- 「なりわい(経済)」岡崎遼太朗さん(LAID-BACKDESIGN代表)、佐伯佳和さん(新見市地域おこし協力隊)

それぞれ10分以内で、流域での活動や高梁川流域学校で関係した事業について発表頂いた。

高山さん「教育関係事業者として、真備町の復興に関わって」

岡崎さん「なぜ、ぼくがフリーペーパーをつつたのか」

岡さん「ジュニア備中志塾の今後のあり方について」

佐伯さん「流域連携によるものづくりの実際を通して(テオリとの連携事例より)」

そのうち、坂ノ上理事進行でトークセッションを行い、今これまでの生き方、活動について、相互に意見交換し、それぞれがしっかりとしたビジョンを持って、事業に取り組んでいることについて、コメンテーターの方々からもエールが送られた。「お金」を中心とした生き方を選ばない者は、「変わり者」と呼ばれるが、今その判断を勇気をもって行うことが出来る人が、地域での新しい生き方の実践するモデルと成りうると思われる。そのため仕組みを高梁川流域学校も備えていく必

カリキュラム

活動フィールドとして、豊田市旭地区等を予定

1回 6/15,16 地域の人と あるく、みる、きく (第1～2回、4回)
 2回 7/26,21 集落を歩く/地域とは何か(地元学)
 3回 8/17,18 地域のお年寄りから話を聞く(聞き書き実習)
セルフデザインと交流会 (第3回)
 4回 9/21,22 1・ヒーターした人たちに話を聞く(合宿予定)
 5回 9/21,22 地域を知る ～暮らし・祭り・祈り・願い～
 6回 10/29,30 地域の人と 課題を考える (第5～8回)
 7回 11/9,10 通算の実験を知り、集落の未来を考える
 8回 11/9,10 地域コミュニティで生きるとは
 9回 12/14,15 地域で支える公共サービスを考える ～教育・医療・経済～
 10回 1/18,19 地域資源の利用を考える
まとめ (第9回)
 11回 2/15,16 自治と自立/豊森の幸福論
 12回 3/15 修了式

※なお上記カリキュラムを予定しておりますが、変更する場合があります。また、上記カリキュラム以外にも公開講座等を予定しています。

要がある。

【第2部】15：40～17：00

■グループワークショップ15：40～16：45

川嶋直先生のファシリテートで、第1部の内容を参加者がそれぞれどのように理解したか、それから何を考えたかについて共有の場とした。

あらかじめ、参加者にA「教育・共育(教育)」、B「まち・さとづくり(環境)」、C「なりわい(経済)」の3つのグループに割り当て、各グループでのワークショップは、「えんたくん」※を使用した方式で行った。共通のテーマ「地域で生きる新しい生き方・仕組みづくり」について、「教育・共育(教育)」「まち・さとづくり(環境)」「なりわい(経済)」3つの視点から検討した。
 ※えんたくんとは、円卓を囲む形でのグループ討議、それぞれの意見をまとめ、相互に確認し合う中で、新たな気づきと合意を形成する。

※各グループのまとめ役を以下の3名とした。

A「教育・共育(教育)」堂野博之さん(笠岡市地域おこし協力隊)

B「まち・さとづくり(環境)」中村泰典さん(高梁川流域学校理事)

C「なりわい(経済)」石原達也さん(岡山NPOセンター副理事長)

各グループ5名程度の小チームで円卓をつくり、参加者それぞれがシンポジウムを通して、考えたことを教習し、最終的には、A41枚に検討された内容をキーワードにして、グループのまとめ役が発表して全員で共有した。まとめ役は、グループの検討の中からいくつかキーワードを抜き出して、さらにA4用紙1枚程度にまとめて、文章、キーワードなどを抜き出して、「高梁川ミーティング2019宣言」に組み入れ、参加者全体の合意として、高梁川ミーティング2019の流域宣言として発表した。



高梁川ミーティング2019大会宣言

高梁川ミーティング2019は「地域で生きる新しい生き方と仕組みづくり」をテーマに、流域に縁を持つ100人が集まり、これからの地域社会の暮らしと仕組みについて学び、流域に生きる決意を新たにしました。

今年度は主催事業として、備中志塾はジュニア講座を含め5回の講座を開催し、講義録として「吉備の歴史と伝統文化」を上梓した。「高梁川トレイル事業」は、昨年度「高梁川トレイル読本」を制作し、本日、今この時間に、かつての「魚荷道(とと道)」で流域の暮らしに思いを馳せながら歩いている。事業構想塾は人材育成を進め、「水島コンビナートの進化」は地元、古城池高校及び関係者の理解と連携の結果、コンビナートクルーズガイドブックと定期クルーズの誕生につながり、「SAVE JAPANプロジェクト事業」は高梁美しい森周辺のプップウソウ、新見草間土橋地区のウスイロヒョウモンモドキなど、希少種生物保護と観察を通して、人と自然、生きものとの良好な環境づくりへの意識を高めた。連携事業では「高梁川マルシェ」、「高梁フォレストジャンボリー」、「こども造形ひろば」、「高校生によるまちの匠への聞き書き」、「高梁川流域の環境調査・保全活動」、「邦楽の里」、「伝統芸能プログラム開発」を展開し、「次世代ネットワーク構築」を事業展開した。協力事業「町家deクラス2018」は備中から全県へ広がった。また「高梁川流域学校111人委員会」を発足し、物心両面の支援の仕組みが立ち上がった。

大会は、西日本豪雨災害の犠牲者への黙とうで始まった。神崎宣武校長のあいさつは改めて備中人の心得と本・支流を問わず隅々に生きた先人たちの思いを糧にして事業を進めてほしいと語り、会は始まった。

中井徳太郎環境省総合環境政策統括官の基調講演「第5次環境基本計画とこれからの社会」では、SDGsの重要性を語り、人間が安全に活動する限界を超え、課題は複雑化し、社会・経済・環境活動は統合的な対応が不可欠であることが求められていると力説した。基本計画では自立分散と相互連携、循環・共生で活力あふれる日本発の脱炭素化・SDGs構想としての地域循環共生圏の実現に向けて、森里川海プロジェクトを推進し、新たな価値とビジネスで成長を牽引する地域の存立基盤を組み立てるために、地域循環経済分析の活用とESG金融の動向を紹介した。

誇りと有機的なつながりを国土の隅々まで行きわたる環境生命文明社会を実現しようと力強く謳い上げ、高梁川流域学校の活動にエールを送った。

続く澁澤寿一NPO法人共存の森ネットワーク理事長は、今回のミーティングのテーマである「地域で生きる新しい生き方と仕組みづくり」の講演において、現代社会の変遷を振り返り、関係性喪失の無縁社会という現実、地域という概念の消滅と愛情の枯渇した状態であると喝破した。買うから、つくる暮らしへ移行し、新しい価値観を育てるために、地域を担う人材の確保と育成を豊森、真庭の具体例で紹介した。そこでは人間関係を確かにし、内部循環経済の拡大を地域経営という視点で仕組みを作ることが不可欠であるとした。幸せな社会をめざし、バランスの良い暮らし、つとめ、かせぎを求め、環境・経済モデルと生き方・働き方モデルを組み合わせ、未来の社会、幸福、生きがいを皆で考え、調和のとれた社会創生を実践することを強く提案した。

トークセッションでは「流域をつなぐ若者たち」をテーマに、ジュニア備中志塾での取り組みで地域と教育者の連携について検討・進化を進めるプロジェクトリーダー、フリーペーパーの制作を通じて社会とのつながりを考えるデザイナー、西日本豪雨の被災における教育分野の活動家、異業種との関わりで地域の資源の活かし方と工夫を学ぶ林業家の4名の若い世代が、更に次の世代との関わりを語ったことは印象的であった。ごちゃまぜの場、分けるから混ぜる。普通が新しい。学び直しから出会いが生まれる、地域の愛情が人を育てることなどが語られ、大いに勇気づけられるセッションとなった。

グループワークは「教育」「まちづくり」「なりわい」の3分野、8グループに分かれてワークショップを進めた。「教育」分野では学ぶ側が主体となり、地域での教育が欠かせないことが指摘された。「まちづくり」では地産地消を原則とし、歴史のタブーを語り、乗り越えること。そして責任ある態度で多様な人がつながり楽しく遊ぶコミュニティを作り出すことを目指し、「なりわい」はこれまでの安定のために働くことから個々にとって内から湧き上がる幸福を得ることを大切にすることで、変わり者も歓迎される地域になることを実現する必要性が共感を呼んだ。

高梁川流域学校設立4年目のこのミーティングでは、SDGsを念頭に置き、高梁川流域圏の暮らしと環境、そしてなりわいの好循環を目指して、地域循環共生圏の方向性を確認し、これからの流域圏における生き方の実践を学び、それを支援する当学校のあり方について検討し、高梁川流域圏の未来へ向け、地域内外に暮らす市民の結びと決意の場となった。

来年度は今年度の事業で体験したこと、学んだこと糧に、森里川海プロジェクトを推進し、各事業を実施しながら笠岡、水島、高梁でエリアミーティングを実施し、本支流問わず隅々にいきわたる意識を忘れずに、仕組みを確認、作り出し、さらに地域を結び直し、5年目の高梁川ミーティングで成果を持ち寄ることを誓い、ここに宣言する。

2019年2月23日

高梁川ミーティング2019参加者一同

主催事業

備中志塾 & ジュニア備中志塾



備中志塾は、高梁川流域学校校長、民俗学者神崎宣武先生の次のような思いからスタートした。

【趣意書】

「日本人にはニッポンがたりない」（政府公示広告のなかの一節）、といわれてから10年が過ぎようとしています。

しかし、依然としてその状況に改善がみられませんが、

この場合のニッポンとは、日本人としてのアイデンティティの共有にほかなりません。そのアイデンティティとは、政治や経済の実力をもって誇示するところもありますが、それは長く続くものではありません。歴史を通じてみると、文化認識から醸成されるところに「普通のねうち」が認められるのです。

とくに、日本では、これまで各地方ごとに多様な文化の相を伝えてきました。ひとつには、政治や宗教の強圧的な関与が薄かったからで、おしなべて競い合うことなく共存、あるいは融合もしてきました。そこでは、相互に認めあう「寛容の精神」も育んでいます。これは、世界でも稀な歴史で、私たちがおおいに誇るべきところなのです。

そうした日本人としてのアイデンティティを誇るには、まずはそれぞれが、地域の文化認識からはじめなくてはなりません。かつては、大人と若者、子供たちが伝統的な行事の準備段階から共働することで、それも可能でした。そこに、長老の語り部も存在し、その言葉（ことだま）が尊重されもしておりました。その文化伝承の仕組みが、現在（いま）崩れてきているのです。

「ニッポンがたりない」ままの私たちがよいはずがありません。では、私たちは何をどう講じたらよいのでしょうか。

まずは、地域の文化に真摯に対峙して、語りあえる場が必要になります。地方から日本に問い、地方から世界に問う、その学習の場が必要になり

ます。そして、「普通のねうち」を備えた次代の人材を育てる場が必要になります。

かつても、そうでした。たとえば、山田方谷による「方谷塾」、阪（坂）谷明盧による「桜溪塾」「興讓館」、福西志計子による「裁縫所」（順正女学校）など。備中地方には、その伝統もあるのです。

ここでは、資格は問いません。ただひとつ、50年後、100年後にも「つなぐ」べく知的な財産をたくわえる備中人としての「こころざし」を共有したい、と思います。

私たちは、ここに「備中志塾」を開設します。

このような主旨で備中志塾は、「普通のねうち」を備えた次代の人材を育成するために、平成24年9月に第1回を開催した後、今年度（平成30年度）の実施で、通算7期（41回）の講座を行い、受講者の延べ人数は、1300人以上となっております。講座の会場は、倉敷市中心市街地に所在する国指定重要文化財大橋家住宅の新座敷をお借りして、18：30～20：00までの1時間半、受講生は共に座学の対面講義形式で備中のあれこれを学んだ。入塾制を取り入れてから、第3期となる今年度は、以下の全4講座を行った。平成28年度以降、時代別に古代、中世、近世と食をテーマにした講座を行っている。第3期の卒業生は、11名で、修了証を取得した卒業生も71名となった。この内容をまとめた講義録『「吉備」の歴史と伝統文化』も地元吉備人出版から平成30年10月31日に刊行された。

第1回 古代吉備の風景

平成30年9月7日（金）18：30～20：00

第2回 中世の村落と三斎市

平成30年10月5日（金）18：30～20：00

第3回 備中神楽「吉備津」

平成30年11月1日(木) 18:30~20:00
 第4回 廿日正月祝い膳
 平成30年12月13日(木) 18:30~20:00

さらに上記のいわば正規の講座の他に、第2期の卒業生の岡隆平さんが企画して、高校生を対象とした「ジュニア備中志塾」を開催し、若い世代に向けての備中志塾もスタートした。ジュニア備中志塾の内容は、以下の通り。

●日時…平成30年8月7日(火) 13:00~17:00

●場所…備中国總社宮(総社市)

●参加者…34名

(矢掛高校学生・金光学園学生・興譲館高校学生・翠松高校学生・玉島高校学生・保護者・引率者・備中志塾卒業生・一般参加者)、その他、関係者11名

●内容…

高梁川流域学校の主要事業として行ってきた備中志塾を学生向けにアレンジし実施した。若者に備中文化の象徴的存在である「備中神楽」を体験して貰い、次世代を担う人材育成のきっかけを作ることとを目的とした。口頭での解説はなるべく短めに抑え、実際に見る・触れてみることを主眼とした。また、学生によるプレゼンテーション発表や、意見交換の場を設け、学生同士による意識啓発を行った。

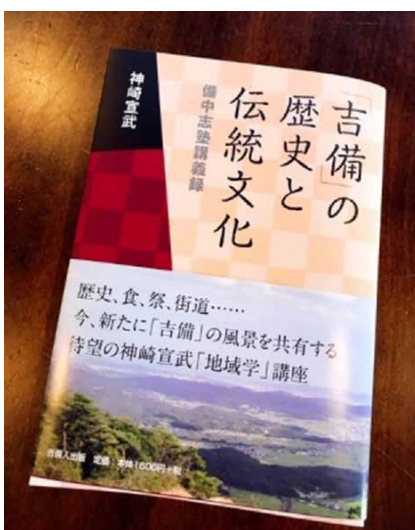
●岡隆平さんの所見

ジュニア備中志塾初開催となったが、今後の展開に向けて十分な手応えを得ることができた。備中の歴史や文化についての高校生の関心度は高いとは言えず、会に参加して貰うためのハードルは極めて高いが、参加した学生は多くが地域活動へのモチベーションを得る結果となった。自ら積極的に何か

の活動をしたという意見が出ているため、今後のジュニア備中志塾の活動は、学生を巻き込んで計画するところから実施していく。

このように備中志塾7期目では、備中志塾で学んだ次世代人材(岡さん)が、地域の高校生に向けて備中志塾の志をつなげる取組みに展開したことは、望外の成果であった。備中志塾で学んだ塾生の方々や備中志塾に啓発されて、地域で何らかの取組みをしていこうとする方々とのネットワークを進展させていく。

本年3月10日(日)には、倉敷国際ホテル桜花の間で、神崎宣武先生「『吉備』の歴史と伝統文化」の出版記念講演会が開催され、備中志塾塾生を始め、倉敷市長、総社市長、井原副市長に臨席をいただき、さらに産業界、金融界、地域メディア、先生のご友人たちと、出版の祝いとこの書籍を一つのツールとして、備中の歴史伝統文化を継承していく思いを誓い合った。



主催事業

備中高梁フィールドミュージアム事業



日本人が大切にしてきた伝統的な自然観を育み、
参加者自身が「社会の繋がり」「持続可能性」を意識する

事業の目的..

自然とのふれあいを通じ、きれいな空気、豊かで安全な水、食事などの自然資本の恵みの価値を再発見・確認の場を提供すると共に、日本人が大切にしてきた伝統的な自然観を育み、参加者自身が「社会の繋がり」「持続可能性」を意識できるようになることを期待している。

(ア)フォレストジャンボリー

ジャンボリーとは、陽気な大きな集まりを意味しており、季節に応じた様々な体験プログラムを開催した。自然とのふれあいの「場」をつくり、五感を研ぎ澄まして「見る」「聴く」「嗅ぐ」と「味わうこと」「触ること」に集中して、その気づきを分かち合い、きれいな水や空気や安心安全な食事などの大切さに気づくことのできるプログラム。また、今期は西日本豪雨災害に見舞われて、森林の持つ癒し効果として、森林療法について学び、体験できる場の提供も始めた。

(イ)緑のインターン事業

高梁川流域の自然環境は大変豊かである一方、社会や生活スタイルの変化により、放置林が増加し、環境保全や防災の観点から大きな地域課題となっている。本事業は、森林の恵みを再認識する機会を設けるとともに、安全に作業を行うために必要な研修会を行う。さらには、技術指導のできるフォレスター、特にリーダーを育成するとともに、各地域それぞれの実情にあわせたボランティア活動を組織し、実施することで意識の向上と活動の拡大を目指している。具体的には、林分調査研修、山林の協会判定研修、林地残材の搬出研修、チェーンソー刈払機の安全講習、炭焼き体験等学び、体験する機会を設け、そして、定期的にそれらを実践できる場を設けている。実施対象..

主に高梁川流域(新見市・高梁市・総社市・倉敷市)の小学生以上

実施内容..

2018年8月9日フォレスターの日(参加者

数8名)【森林整備と森の利活用事業】

下草刈りの実践と竹林整備の実践。

2018年8月12日夏の備中高梁フォレスト

ジャンボリー(参加者数63名)【環境教育事業】

水辺をテーマに、他団体協働方式によるワーク

シヨップ型体験イベントを実施。自然クラフト、

水辺の安全とカヌー体験、水辺の生き物観察、

竹林整備体験と竹筏づくり体験。

2018年9月22日フォレスターの日(参加者

数10名)【森林整備と森の利活用事業】

下草刈りと間伐・間伐材の玉切り体験(炭焼き

用)の実施。

2018年10月8日キノコ観察会(参加者数

66名)【環境教育事業】

野生キノコを採取、鑑定、味わうことにより毎

年各地でおきる「キノコの誤食による事故」を防

ぐ為に必要な基礎知識を養うと共に森の恵みを

体験していただいた。

2018年10月14日フォレスターの日(参加者

数18名)【山の境界判定とGISマッピング研修】

判定し難い山林の境界判定法とGoogle

マップを活用したGISについて学ぶと共に、高

梁美しい森の境界の判定実習。

2018年11月4日フォレスターの日(参加者

数5名)【森林整備と森の利活用事業】

炭窯の整備と炭焼きの開催。木炭及び竹炭づ

くりの実践を行った。

2018年12月1日フォレスターの日(参加者

数20名)【森林整備と森の利活用事業】

森づくり活動の実践指導。下草刈り、キノコ林整備、雑木林整備を実践すると共に、地域企業の森づくり活動(参加者185名)における指導支援を実施。自分たちで作った炭を使ってBBQを楽しみながら交流を図った。

2018年12月23日冬の備中高梁フォレストジャンボリー(参加者数162名)【環境教育事業】

薪(ハイマスエネルギー)づくり体験と利用体験として、薪ストーブやたき火体験を実施。その他、ツリークライミング体験、山野草観察会と山野草料理の体験、森林療法体験などを行った。

2019年2月3日フォレスターの日(参加者数5名)【森林整備と森の利活用事業】

シイタケ原木と薪づくりの実践。チエーンソー講習受講済の方々を中心に原木50本、薪づくりを実践。

実施成果と課題…

目標に対する成果は、下記の通りであった。

・目標…参加者 のべ150名以上

活動1. 環境教育(フォレストジャンボリー)参加者数 291名

活動2. 森林整備(フォレスターの日)と森の利活用 参加者数 71名

計362名となり、参加者数に対する目標は達成された。

・目標…環境意識向上による活動へのリピーターを獲得(10%以上)

フォレスターの日への複数回参加者は約90%。夏のフォレストジャンボリー参加者のうち、冬のフォレストジャンボリー参加者(リピー

ター)は約30%。秋のフォレストジャンボリー(キノコ観察会)参加者の内、約半数の参加者は、過去に当社の別のイベントにも参加したことのある者であった。概ね達成できたと考えている。

・目標…本事業による森林整備1ヘクタール以上

活動2.において、フォレスターの日による里山林整備0.5ha、下刈1.5haとなった。これは、12月に実施した、森林整備の実践指導による整備面積も含んでいるが、里山林の環境保全推進の一つの方法として評価できるとかが得ており、事実、目標達成に大きく影響したと評価できる。また、活動1.においても竹林整備及び間伐体験を行っており、約0.2haの整備を行っており、目標を達成できた。

また、高梁川下流域である倉敷市に拠点を置く薪ストーブ店やログハウスメーカーより、当社の活動の副産物でもある薪や炭をぜひ販売してほしいという依頼が新たに発生したことは、本年度における大きな成果であったと考えている。当社の活動は、薪や炭の販売を目的としたものではない。環境保全のための活動を通じ、その副産物である薪や炭を山林の回復可能な範囲内での有効活用のとして考えている。当社にとって収益とは、この販売に対する売上よりも、薪ストーブやログハウスの興味のある方々へ直接アプローチし、当社が主催する活動に参加してもらえる機会を得られたことである。今後は、このような高梁川流域における業者等を一つの情報発信基地として、人材および資金調達できる仕組み作りを進めていく計画である。

・課題：これまで、『「実際に行動をおこす」

段階へのステップアップが非常に難しい』という課題があった。本年度も完全にはクリアできなかったわけではないが、その課題に対し、実際に指導者として実践してもらえる機会を設けたことで、改善の兆しが見えている。しかしながら、まだまだ圧倒的に人材が不足しているのが現状であり、引き続き改善に努めたい。整備活動の中にも何らかの“楽しみ”や“わくわく感”が持てるような事業の組み立てを、次年度は計画したいと考えている。参加者の声…

●楽しい時間をありがとうございました！(夏のジャンボリー参加者)

●竹のいかだ、とっても楽しかった！(夏のジャンボリー参加者)

●ダム湖の水は少し濁ってた。ゴミもたくさん浮いてた。水と一緒にゴミが流れてきたんだと思う。少し寂しくなった。(夏のジャンボリー参加者)

●子どもたちのキラキラした笑顔が印象的でした。(冬のジャンボリー参加者)

●クラフト体験の作品を持ち帰ることができ、自然色豊かなクリスマスを迎えることができました。(冬のジャンボリー参加者)

●近くにこんな良い場所があるとは知りませんでした。再訪したいと思います！(冬のジャンボリー参加者)

●キノコはむずかしい。。。 (キノコ観察会参加者)

●これからも、子どもが森と親しんだり、森について知れるようなイベントを楽しみにしています！(冬のジャンボリー参加者)

●最初は怖かったけど、木の上から見る景色は最高！見えない遠くまでよく見えた！(冬のジャンボリー参加者)

のジャンボリー参加者) ●いい汗かきました。(フォレスターの日参加者)

●自分でつくった炭でBBQできるって、なんかすごい！(フォレスターの日参加者)

主催事業

SAVE JAPANプロジェクト



互いに学びあい、地域の環境問題の解決のための行動が増加する好循環が創出

SAVE JAPANプロジェクトは、損保ジャパン日本興亜株式会社が、顧客にWeb約款をご選択いただくことにより寄付を行い、地域の環境団体やNPO支援センター、日本NPOセンターが一緒になって、全国各地で「いきものが住みやすい環境づくり」を行うプロジェクトである。本プロジェクトは2011年からスタートし、地域住民に対して環境活動に参加する機会を提供し、環境問題への関心が高いコミュニティづくりに貢献すること。多様な主体との「連携」「協働」を促進することで、関係団体・関係者や参加した地域住民が互いに学びあい、地域の環境問題の解決のための行動が増加する好循環が創出され、「いきものが住みやすい環境づくり」につながっていくことを目標とするものである。

2015年10月より地域定着期(第2フェーズ)としてプロジェクトを実施することになり、高梁川流域学校では、この時期から希少種生物であるブッポウソウ(高梁市高梁美しい森周辺)とウスイロヒヨウモンモドキ(新見市草間台)を保護観察対象として、SAVE JAPANプロジェクトに取り組んでいる。そして、今年度はその最終期間(2018年10月〜2019年9月)となり、損保ジャパン日本興亜株式会社岡山支店、日本NPOセンター、岡山NPOセンター、高梁市、新見市草間台の地域団体と協働して、それらの活動を地域に定着させ、持続可能な体制とすること、「いきものが住みやすい環境づくり」を通じて、「生態系全体、地域の環境問題の解決のための行動をいかに起こしていくか」を大テーマにして、平成30年度は、以下のような事業を実施した。その際に、SDGs(持続可能な開発目標)や「生物多様性地域戦略」の考え方を手掛かりにして、プロジェ

クトに取り組む様々な方々と一緒に検討を行った。

●シンポジウム「生き物の住みやすい環境づくりを目指して」

日時：平成30年5月19日(土) 14:00〜17:00
 場所：倉敷市立美術館第2会議室
 参加者：35人
 内容：

【SAVEJAPANプロジェクトの目指すところ】14:05〜14:15
 損害保険ジャパン日本興亜株式会社岡山支店課長 阪口晃氏

【これまでの高梁川流域学校での取り組み】14:15〜14:25

【各プロジェクトからの報告①】14:30〜15:00
 ・ブッポウソウの保護活動(高梁美しい森周辺)

黒田聖子氏(兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科)

小見山節夫氏(NPO法人フォレストフォーピープル岡山)

【各プロジェクトからの報告②】15:00〜15:30
 ・ウスイロヒヨウモンモドキ保護活動(新見市土橋地区)

松尾秀行氏(日本チョウ類保全協会)

三宅誠治氏(鱗翅学会保護特別委員)

【シンポジウム】15:45〜16:45
 テーマ「生き物の住みやすい環境づくりを目指して」
 ・コーディネーター

池田満之氏(中国学園大学子ども学部准教授)

阪口晃氏(損害保険ジャパン日本興亜株式会社岡山支店課長)

河邊誠一氏(倉敷芸術科学大学名誉教授)

黒田聖子氏(兵庫県立大学大学院地域資源マネジ

メント研究科)

江田伸司氏(倉敷市自然史博物館主幹学芸員)

吉田建治氏(特定認定非営利活動法人日本NPOセンター事務局長)

【質疑応答・アンケート】16:45~17:00

●ウスイロヒヨウモンモドキ観察会

日時:平成30年6月10日(日)10:00~14:

00

場所:新見市草間土橋交流センター

参加者:約30人

内容:絶滅危惧種1種に指定されているウスイロヒヨウモンモドキの生態を通じて、地域の自然環境への関心や生物多様性への理解を高め、人と自然、自らの保護活動への関わり方について検討する。

●ブッポウソウの巣箱観察

日時:平成30年7月1日(日)10:00~14:

30

場所:高梁美しい森

参加者:約20人

内容:専門家によるブッポウソウの講義、観察を通して生態を深く知り高梁川中流域の環境保全と暮らしを学び、体験していただくことで、自然と人との共生について検討する。

●ブッポウソウの巣箱づくり

日時:平成30年10月20日(土)10:30~15:

30

場所:高梁市宇治地域市民センター

参加者:約20人

内容:小学生以上の子どもと親を対象として専門家によるブッポウソウ(絶滅危惧1B類に指定)に関する講義と生息地の自然観察と、来年春に飛来するブッポウソウの子育てのため

の巣箱づくりを行う。このプログラムを通して、人と自然、生命の循環について学びを共有する。

今回開催場所を、初めて高梁美しい森から高梁市宇治地域市民センターに移した。ブッポウソウの研究者の黒田聖子氏の研究フィールドであると同時に、市民との協働をより深めることを目的とした。

●シンポジウム:生物の視点からの環境・地域づくり〜SDGs目標15を実現するために
日時:2019年3月9日(土)13:00~16:30(開場12:30~)

会場:きらめきプラザ705
内容:生物多様性地域戦略を意識しながら、「生物の視点からの環境・地域づくり」をテーマに、SAVEJAPANプロジェクトのこれまでの事例と県内の先進事例から、これからの具体的な行動について検討する。また、2030年に向けてSDGsが進められる中で、生物の視点からこれからの私たちの暮らしや地域づくりについて、全体でアイデア出しを行う。

・SAVE JAPANプロジェクトについて
13:00~13:10
村中尚樹氏(損保ジャパン日本興亜株式会社岡山支店副長)

- ・これまでの取り組み報告 13:10~13:30
- 1)ブッポウソウの保護・観察(活動と成果)
- 2)ウスイロヒヨウモンモドキの保護・観察(活動と成果)
- 3)旭川かいぼり調査(活動と成果)
- ・先進事例報告
- 1)蒜山高原のサクラソウの保護活動
- 2)ダルマガエルの保護・活用

・シンポジウム14:45~16:30
テーマ:生物多様性の保全と利用〜いかに地域づくりにつなげていくか〜

齋藤達昭氏(岡山理科大学理学部准教授)
片岡博行氏(重井薬用植物園園長)
黒田聖子氏(ノートルダム清心学園教諭)
田井義明氏(新見市土橋地区振興会会長)
・シンポジウム要旨

SAVE JAPANプロジェクトを通じて、ブッポウソウの保護は、適切な巣箱設置によって、国内の他地域と比較しても生息数の大幅な増加(100羽↓500羽)があり、大きな成果があったといえる。参加者もブッポウソウの生態や生息環境について理解が進み、ブッポウソウを身近な生物として意識するとともに、生態系全体の保全についての意識も向上した。

一方、ウスイロヒヨウモンモドキは、地域の方々の尽力にも関わらず、年々個体数を減少させている。平成31年にはついに絶滅の危機を迎えているとの報告があった。しかしながら、ウスイロヒヨウモンモドキを通じて、自然との共生感覚も実感でき、冬の草刈りなどの共同作業によって、コミュニティのつながりが強くなったことを感じる。小さな蝶の存在が、生物や自然の多様性に気づかせてくれた。

重井薬用植物園片岡園長からは、「生物は地域をみる指標」である。そこに生きている生物をみるとその土地の風土、歴史、産業を想像することが出来る。その意味でそこに生きている生物について知ることは、地域を知ることになる。地域を知ること、地域住民の地域愛、「熱」のようなものを醸成することが大切であり、その「熱」を行政などに伝えて相互に連携しながら、それぞれの地域での役割分

担をする中で、多様なビジネスを生み出す。生物多様性地域戦略は、まさにそのための戦略であり、生物多様性の保全と持続可能な利用の重要性を浸透させ、地域における行政、事業者、民間団体、地域住民などによるさまざまな取組を進めるため、都道府県をはじめ地方自治体がそれぞれの地域の特性に応じて地域戦略を策定するとされている。絵に描いた戦略でなく、地域の一人一人の思いが反映した生きた戦略とするために、今後継続して、ここに集まっている団体や個人が連携して生きた戦略を生み出す仕組みづくりも大切である。



倉敷市生物多様性地域戦略概要から

主催事業

高梁川マルシェ〜流域時間の過ごし方〜



自然と人が共生し、心豊かに美しく暮らすライフスタイルを提案

西日本を中心とした平成30年7月豪雨災害により、被災された皆様、関係する皆様に心よりお見舞い申し上げます。高梁川流域でも倉敷市真備町をはじめとして、総社市、上流域の新見市、高梁市など広範囲に被害を受けました。本年度の高梁川マルシェは、そのような状況下の中で、第16回おかやま県民文化祭「文化がまちにある！プログラム」として「がんばろう岡山！〜復興へつなげて〜」を掲げて、あらためて流域での暮らしを考え、そこでの人と自然のつながりや人と人の支え合いを醸成する場としてマルシェを開催しました。流域のこだわりの食とモノづくり作家、音楽家、アーティストたちがコラボレーションして、自然と人が共生し、心豊かに美しく暮らすライフスタイルを提案し、以下の通り、様々な取り組みを実施しました。

- 日時…平成30年10月20日(土)〜21日(日)の2日間
- ※20日(土)20時まで、大橋家住宅をナイトマルシェ会場として演奏会を実施しました。
- 場所…国指定重要文化財大橋家住宅、阿知2丁目ひろば
- 出店者…食関係10店舗、モノづくり作家15店舗
- 会場装飾…能勢聖紅氏(デコレーター)、ペガサスキャンドル(キャンドル)
- 音楽演奏…nensow氏(サウンドインストラクター)、神遊山編照院大原英輝氏(バイオリン)
- チラシデザイン…LAID BACK DESIGN 岡崎朗太郎氏、内田祥平氏(銅版画作家)
- 事務局及びスタッフ(学生ボランティア含む)：30人
- 来場者…2,000人以上

●取組内容…

1. 地域の食文化、モノづくり文化発信のマルシェ
高梁川流域を中心にオーガニックで健康的な美味しさにこだわりの食と陶芸、ガラス、漆器、木工などのモノづくりの作家の展示とコラボレーションでの作品展示と販売を行いました。天気にも恵まれて、両日とも多くの来場者の方々がおり、出店者との交流も活発に行われた。国指定重要文化財大橋家住宅と阿知2丁目ひろばをつなぐマルシェとしても、美観地区側からの観光客も多く参加された。くらしき作陽大学のボランティア学生18名も事前に高梁川マルシェについて学習し、積極的にマルシェに参加した。学生の目線で出店者や来場者に対して、マルシェの価値を伝えることも出来た。

2. 国指定重要文化財大橋家住宅とアートのコラボレーション
文化財とアートとのコラボレーションをテーマに、アートディレクターの三戸龍家氏の企画で、デコレーターで装飾家の能勢聖紅氏による会場装飾、音楽家nensow氏によるサウンドインストラクション、吹きガラス作家の水口智貴氏によるガラスオブジェ、ナイトマルシェでは、神遊山編照院住職大原英輝氏によるバイオリン演奏を実施致しました。会場装飾では、阿知町通りに店舗を映したペガサスキャンドルのキャンドル演出も行った。このコラボレーションに対する来場者の評価は非常に高く、当日のInstagramやFacebookへの投稿数の増加にも反映されている。

国指定重要文化財大橋家住宅内に飾られた能勢聖紅氏らのコラボ作品

3. 食とアートでまちをつなぐフットパス(まち歩き)

大橋家住宅を中心に阿知町の食やアートなどをマップングした左のような地図を制作し、まちの商店街やギャラリーなどを紹介するワークショップを実施しました。倉敷市中心市街地には、大原美術館を中心に、ギャラリーやアーティストや工芸作家の作品を展示するカフェが多くある。しかしながら、場所が分かりにくいなどの課題もあり、今回マルシェでの協力を承諾いただいた店舗と協力して、まち歩きのワークショップを実施した。初めての試みでしたが、倉敷駅から一番街商店街を中心にまちを紹介しながら、各ギャラリーなどを紹介し、参加人数は、5名と少なかったが、「倉敷のまちをよく知ることが出来た」など好評のうちに終了することが出来た。

4. その他

マルシェの開催期間に今年7月7日の豪雨災害で大きな被害を受けた、特定非営利活動法人 岡山マインド「こころ」真備竹林麦酒醸造所(高梁川マルシェに参加)に対して、期間中義援箱を設置し、支援を行った。

●事業の成果

国指定重要文化財大橋家住宅と高梁川マルシェというマッチング、相乗効果によって、倉敷を始め、流域圏の新しい文化発信が出来るかと考えている。ソーシャルネットワークへのアクセス数などで、具体的な数値向上を目指した。結果、Facebookの「いいね」数は、2,306から2,350と微増にとどまっ

たが、Instagramでは、#タグ付きのフォロワーが409と大きく増加し、高梁川マルシェでの情報発信が向上した。

高梁川マルシェで体験する時間を通して、地域の自然、歴史・文化、地域で活動している様々な作家やアーティストとの交流から、高梁川流域圏の豊かさに気づき、自身もその流域圏に住むものとして、地域愛の醸成に貢献できると考えている。流域市民として積極的に地域に関わる精神性が培われることによって、生活の質の向上にもつながる。マルシェ参加者数は、約2,000人でしたが、このような交流する時間を考えると、このくらいの人数が適正な来場者数かもしれないとも考えられる。

食の出店者、作家、アーティストなどのコラボレーションで、新しい価値創造の場につながることで、例えば、食と作家のコラボレーションで何らかの商品開発が生まれたり、アーティスト同士のコラボレーションで新しい空間演出に発展することが期待されていた。結果、国指定重要文化財大橋家住宅を会場にして、能勢聖虹氏を中心に2人のアーティスト、1人のガラス作家の素晴らしいコラボレーションが生まれた。非常に高い文化的な空間を創り出した。その空気感の中で、出店者の方々のクリエイティブな連携も進んだ。グラノーラと甘酒、焼き菓子とコーヒーなどをコラボさせた商品開発につながった。銅版画家の内田祥平氏には、マルシェ用に制作してもらった作品をそのままチラシにさせて

頂き、これまでにないアートな雰囲気

のチラシ

倉敷のまちのギャラリーやカフェテリアなどをつなぐことで、倉敷のまちのアートを中心としたマップづくりを行った。その結果、倉敷への観光客などの集客交流人口の増加にもつながり、地域経済にも貢献できた。期間中天候に恵まれたこともあり、マルシェへの来場者は昨年並みだったが、まちを楽しみむきつけを作ったことで、他のギャラリーやカフェへの来客に波及効果があり、地域振興にもつながることが出来た。

以上のことから、マルシェを通して、マルシェに関わる関係者(出店者、出店者の仕入れ先、協力者、スタッフなど)を中心に地域のまとまり力が向上することに貢献できた。今後これもこれからの地域づくりに必要な要素を加えて、文化的な側面だけでなく、「環境」に関わることに十分に配慮した活動を企画していく。

SDGs 目標 目標2(2.4)3(3.9)4(4.7)8(8.9)12(12.8)



主催事業

水島コンビナートの進化

水島コンビナート誕生の歴史や纏わる秘話、
コンビナート生産の息吹を体感して貰う

嘗ては、漁労と農業によって生計を立ててきた水島。

コンビナートの進化は、その歴史を塗り替えることになった水島コンビナート誕生の歴史や纏わる秘話、その後の発展とコンビナートの最新情報などを、企業OB達の解説と、地元古城池高校生によるナレーションによって理解すると同時に、1時間余のクルーズを通して、コンビナート生産の息吹を体感して貰うことを目的とするプログラムです。

前年度を上回る幅広い展開と持続可能性を目標にスタートした第4期は、クルーズ参加者が前年を大幅に上回る178名となった。

特筆すべきは、参加者層の拡大に加え、2年前から信頼関係を築き上げてきた地元古城池高校の全面的支援を受け、生徒さんたちのガイドによる、クルーズを実現できたこと、更に、船のチャーター先である水島通船(株)が、自社事業として、2018年末から、毎月、第4土曜日に、ナイトクルーズの実施に踏み切ってくれたことが、持続可能性と言う意味で、今期事業の終美を飾る、最大の成果となった。

主たるクルーズを振り返ってみると、前年度のJTBクルーズの幕引きとなった7月のナイトクルーズには、遠路、京都・神戸方面からNHK支局の5名を含む19名が参加、それに先立つ4月には、山陽新聞の若手記者たちの研修用に10名の皆さんに乗船頂いた。

また、10月には倉敷観光大使の「うめ吉」さんが、東京から27名の方々をお連れ下さったり、同じく10月には、水島商店街の人たちに加え、水島支所、JFEスチールから計32名の参加もあって、幅広い層に楽しんで頂くことができた。

更に、11月には、水島商店街の若手店主たちによって結成された「水島もりあげ隊」の主催するイベント「水コンパーティー」と連携し、水コンを通じてカップルとなった人々を対象に、お祝いクルーズを実施するなど、新たな展開に向けて希望の持てるクルーズとなった。

以上のおり、第4期は、多方面からの参加者を得て、順調な推移を辿ってきたが、今後は、臨海鉄道との連携による水島エリアへの集客力アップや昨年立ち上げたばかりの「水島滞在型環境学習コンソーシアム」その他、関係団体・組織との協働を通じた水島のまちづくりへの貢献、更には、高梁川流域他地域との交流の場の創出を目指すなど、水島の魅力を広く世間に喧伝すべく、活動を継続して行く所存である。

一方で、流域学校の最終年度を迎えるに当たって、乗り越えていくべき課題も残る為、それらへの対応策も模索していく必要がある。

■今後、解決していくべき課題

- 1…水島発コンビナートクルーズの広報
 - 2…後継者の育成
 - 3…コンビナート企業の協力
- が考えられるが、それぞれの課題に対して、以下の方針で取り進めていく予定である。

1…水島発コンビナートクルーズの広報

児島発のクルーズは、倉敷市のサポートも得て、人気を博しているが、真の水島コンビナートの魅力を満載し、定期就航をスタートさせた水島通船(株)と連携した効果的な広報活動が必須である。行政のサポートを得ることは勿論のこと、自らの手で、商店街の店先やホテル、その他、各種イベントでチラシを配布したり、SNSやHPを

通じて、水島コンビナートの進化の歴史を発信するなど、幅広い広報戦略を立てて展開していく必要がある。特に、水島地区に2019年中に複数のホテルが建設されることになっていることから、これを絶好のタイミングと捉え、時宜に合った対応をしていくことが求められる。

2..後継者の育成

現状では、古城池高校が、主体的に、本事業に関わってくれているお陰で、円滑な活動が進められているが、生徒達の活動は、現在までのところ、在学期間に限られること、また担当教員の交代などにより、事業への関心の度合いも変化する可能性があることから、こうした不安定要素を取り払い、後輩たちに自動的に引き継がれるような仕組みづくりが求められる。

そうした意味では、卒業後、一人でも多くのOB/OGたちに戻ってきて貰えるような魅力的な水島を創り上げていくこと、また、参加してくれた生徒さん達にその後の活動状況や実績を継続して伝えていく、アフターケアを含めた仕組みづくりも、今後の重要な課題であろう。

また、その一方で、新たな参加者を募ることも必要といされる為、他エリアの教育機関への呼びかけや教育委員会への協力要請、などあらゆる可能性を探りながら、今後、後継者育成に向けた体制強化に臨む必要がある。

3..コンビナート企業の協力

現在までのところ、クルーズガイドやコンビナート研修の指導者は、石油企業の出身者に限られていることから、石油以外の専門知識を持つ他業種の企業OBの参加協力は是非とも実現させたい課題である。一方で、ナイトクルーズやコンビナートの夜

景は、京浜地区をはじめとするエリアでは、大変人気があるスポットでもあり、企業PRや研修の教材としても活用できると考えられる為、コンビナート主要企業の門戸を叩くなどして事業の理解を頂きながら、人材、資金、両面からの協力要請を行っていく必要がある。



主催事業

伝統芸能を活用した 体験プログラム開発事業



「本物志向」で「持続可能」な
観光プログラムの開発に向けて。

△概要▽

本事業では、高梁川流域において、高梁川流域において、体験型の観光プログラムをすでに実施している事業者等のリソースアップを図った。

あわせて、それらのコンテンツを組み合わせたリして参加費を徴収できるプログラムとして、「文化体験モデル」「ナイトプログラムモデル」「被災地復興支援型モデル」のモデルプログラム3本を開発し、特に「文化体験プログラム」については、テスト的に実際にインバウンドでのお客様を案内して(テストツアーの実施)、検証を行った。

また、流域内の体験プログラムの「一括予約などを取りまとめる団体のあり方について、検討を行う」とともに、体験型観光プログラムを受け付ける予約システムについて、既存のオンラインサービス等について、比較検討を行った。

モデルテーマ

【プログラム1】備中・吉備の国の伝統的な文化体験する「文化体験コース」

【プログラム2】倉敷の夜を楽しむ、「ナイトプログラムコース」

【プログラム3】真備町を訪れる、「被災地復興支援型コース」

△プログラム1・・・備中・吉備の国の伝統的な文化・芸能を体験する「文化体験コース」▽

2泊3日、もしくは3泊4日の滞在プログラムのあること、備中・高梁川流域の伝統的な文化体験を行うプログラム。主要なコンテンツは、「吉備神社参拝(鳴釜神事体験)」「地酒試飲体験」「和の音楽(太鼓、尺八、三味線・・・)体験」「日本の在来種の薄荷で楽しむ、香りのプログラム」「瀬戸内のグルメ(寿司と地酒)」など。

△モデルプログラム2・・・倉敷の夜を楽しむ、「ナイトプログラムコース」▽

2泊3日、もしくは3泊4日の滞在プログラムのうち、特に倉敷美観地区の夜を楽しむプログラム。主要なコンテンツは、「観光ガイドが案内する夜の倉敷」「高梁川流域の特産品が集まったナイト・マーケット」「地元住民と行く居酒屋での和食体験」「古民家で楽しむ夜伽の茶会」など。

△モデルプログラム3・・・真備町を訪れる、「被災地復興支援型コース」▽

2泊3日、もしくは3泊4日の滞在プログラムのうち、1日を真備町で過ごすプログラム。水害からの復興に向けた取り組みを視察するとともに、竹を使ったものづくり体験を楽しむ。主要なコンテンツは、「語り部から聞く水害と復興」「竹のものづくり」「竹の家具工房見学」「竹で作った楽器体験」など。

■テスト施行した「文化体験プログラム」

日程・・・11月5日～7日2泊3日

参加者・・・60代女性2名(うち1名は、アメリカ在住)。毎年、日本国内のあちらこちらを2泊3泊程度(予算1名あたり20万円程度)で旅している。

△参加した主要な体験プログラム▽

「国宝・吉備津神社参拝(鳴釜神事体験)」「吉備の古墳群と国分寺散策」「美観地区まちあるき」「大原美術館キュレーターズブレイクチャーター」「酒蔵訪問・試飲」など。

△今回の体験ツアーの費用▽

お一人様 97,783円を各施設にて、実費にてお支払いいただいた(コーディネート費用は含まない)

い。

△体験者の感想▽

・(特に印象に残った体験は?)
 鳴釜の神事は、貴重な体験ができた。世界でもここでしかできない体験。

・(飲食で良かったのは?)

日本酒が良かった。造り酒屋に行つて、蔵も見れて、試飲もできて、大変満足。備中杜氏のことなどは、まったく知らなかった。

・(美観地区はいかがでしたか?)

美観地区は、商業化されてすぎていて、正直に言えば「チープ」。もっと本物志向で良いと思う。大原美術館のレクチャーは、とてもよかった。特別感のあるプログラムだった。説明も上手だった。

・(あると良いサービスやビジネスは?)

ヨーロッパなど、歴史がある街には、必ずその町その町に香水専門店がある。日本を旅行して、物足りないのは、そこ。倉敷には薄荷があるので、商品化・ビジネス化するとお土産に良いと思う。

■本事業に係る検討会の開催

以下、全3回の検討会を開催した。

9月13日(木)レクチャー及び検討会の開催(参加者12名)

・講師 独立行政法人中小企業基盤整備機構(中小機構) 理事 堺井啓公氏

10月16日(火)ワークグループの開催(参加者3名)
 11月13日(火)中小機構訪問によるワークグループの開催(参加者3名)

■この事業の成果と課題

【成果】

本事業において、備中・高梁川流域エリアで、高

付加価値な体験プログラムのモデルプログラムを開発することができた。また、いわゆる富裕層である2名の旅行者を対象に実施したテストツアーでは、改めて「本物志向」が確認でき、そしてその顧客のニーズに対して、高梁川流域の魅力あるコンテンツはインバウンドも含めて対応できることを確信した。一方、現状の倉敷美観地区全体の状況には、厳しいコメントを頂戴する結果となった。

【特に本事業に関連したSDGs 17のゴール】

目標4 質の高い教育をみんなに(観光関連の技術的・職業的スキルの習得)

目標8 働きがいも経済成長も(高付加価値型の取組み)

目標11 住み続けられるまちづくりを(文化遺産の保護・保全)

目標12 つくる責任、つかう責任(持続可能な観光業)

【課題】

今後、テーマに特化して、高付加価値なプログラムをビジネス化して安定的に運営するには、顧客の個別ニーズに対応して、その都度プログラムを組成することができる「地域サービス統轄会社」が必要不可欠であることが、ワークグループでの議論でも指摘された。複数のコンテンツホルダー(サービス提供事業者)と緊密に連携して、顧客満足度を高めることができる「地域サービス統轄会社」の設立が急がれる。一貫して顧客と直面するコンシェルジュや、ナビゲーターを務めることができるガイドの養成も必要であることが明らかになった。

真備町、倉敷・美観地区、児島・下津井と、ART SETOUCHI/瀬戸内国際芸術祭との連携
 倉敷の文化・芸術資源と、瀬戸内国際芸術祭の資源を、相互に活かした、総合的な文化・芸術地域へ。

広域高梁川流域への波及効果



協力事業

町家deクラス2018



「町家」の空間で、江戸・明治・大正・昭和から平成の現代に伝わる地域の伝統的な生活文化の魅力を五感で体感

●開催について

【第16回おかやま県民文化祭「これがOKAYAMA!プログラム」町家deクラス2018】として岡山県内の町並みに残る、文化財クラスの建築物や、「蔵・倉」、「商家」、今も暮らしの残る小さな「町家」の空間で、江戸・明治・大正・昭和から平成の現代に伝わる地域の伝統的な生活文化の魅力を五感で体感していただきたいとの思いで、「町家deクラス、懐かしい未来」を合言葉に、備中、備前、美作の各地で「町家deクラス」2018を2018年11月3日から25日まで開催した。

本年度の開催地区は倉敷市／美観地区及び周辺地区・玉島・児島・茶屋町、浅口市／鴨方・金光、高梁市／吹屋、新見市、総社市、矢掛町、早島町、笠岡市／金浦、岡山市／出石・足守・西大寺、瀬戸内市／備前福岡・牛窓、津山市／城東・城西、真庭市／勝山・久世、美作市／大原古町、勝央町／勝間田、新庄村の11市3町1村で64の体験プログラムと20のまち歩き開催した。

●開催内容と成果

総参加者は1926名(内訳はプログラム参加者が1544名、スタッフ382名)

尚、パンフレット印刷時にカーボンオフセットを付加することで、環境配慮と共に、わずかながらではあるが東日本大震災の被災地支援を行った。また各会場で西日本災害義援金の募金箱を設置し、集まった義援金を岡山県へ寄付した。

「備中no町家deクラス」として2014年から4年間備中地域で毎年開催してきた。5年目になる今年度はおかやま県民文化祭の主催事業の一つ「これがOKAYAMA!プログラム(町家deクラス2018)」(がんばろう岡山!「復興へ心つなげて」)として備中地域だけでなく、備前地域、美作地域の町並み保存団体及びまちづくり団体、自治体と協働して岡山県全域で開催した。開催にあたっては備中町並みネッ

トワークが開催する毎月定例の会議や、町並み見学、勉強会、年に一度の備中町並みゼミで育まれた交流と連携、加えて(公社)岡山県文化連盟のネットワークが全県のまちづくり団体の参加を可能にした。

●主催：岡山県、(公社)岡山県文化連盟、おかやま県民文化祭実行委員会、備中県民局、備中町並みネットワーク、各地区まちづくり団体(順不同)

■運営団体(順不同)

大谷地区元気いっばいまちづくり協議会・NPO法人倉敷町家トラスト・金浦の楽しい仲間たち・かもがた町家管理組合・吹屋町並み保存会・NPO法人総社商店街筋の古民家を活用する会・備中矢掛宿の街並みをよくする会・新見御殿町・倉敷友の会・倉敷市文化財保護課・倉敷伝建地区をまもり育てる会・倉敷物語館・素気工房・大橋家住宅・NPO法人つくば片山家・いかしの舎・倉敷芸術科学大学芸術学部まちなか研究室東町・玉島おかみさん会・新町「桃和」・旧野崎家住宅(一社)子どもソーシャルワークセンターつばさ・吉備のくに未来計画(一般社団法人岡山県建築士会・NPO法人後楽園門前まち復興舎・岡山市近水観光振興会・西大寺井戸端会議・備前福岡古民家プロジェクト・ウシマド町家スタイル・牛窓関町ふれあいのまちづくり・カジュアルな・nacking・しようおう支援協会・古町町並み保存会・株式会社まちづくり会社新庄・城西まちづくり協議会・作州餅保存会・つやま城東まちかつ・勝山町並みクラフト市実行委員会事務局・まにワツシヨイ・文藝イシユタル

■協力運営団体：高梁川流域学校・浅口市地域おこし協力隊・笠岡市地域おこし協力隊

倉敷市地域おこし協力隊・瀬戸内市地域おこし協力隊・美作市地域おこし協力隊・勝央町地域おこし協力隊

■町家deクラス2018実施事務局

・備中町並みネットワーク：倉敷市東町1-2-1 NPO法人倉敷町家トラスト事務所内

協力事業

こども造形ひろば



造形活動を楽しみながら 感性を豊かにし“生きる力”をはぐくもう

「こども造形ひろば」は、「そうじゃぼつけえ造形の会」が、公益財団法人総社市文化振興財団の事業に採択され、今年度で3回目の開催となる。総社市内全校の2・3年生を対象に公募し、8回の講座と全員の作品を一堂に展示する展覧会を開催、継続して造形活動に参加を希望するOG・OBのために特別講座も開催した。また、今年度は岡山県立大学COC+事業を受け入れ、一般講座では「ボランティア演習」を、特別講座では「地域協働演習」として、生活廃材による作品を企画から制作まで、OG・OBと大学生とで共同制作した。

【内容】

開催日…5月～9月(全8回講座と展覧会)
会場…常盤小学校 多目的室・図工室(講座)、
展覧会(総社市立図書館展示室)
対象…小学校2・3年生

参加者…38名

講師…布下満(洋画家)大平和朗(洋画家)角田みどり(中国短期大学教授)平田敦司(彫刻家)

金池兼広(ものづくり作家)平田勉(小学校教諭)
柏原寛(中国学園大学准教授)

中山裕那(ねんど作家)

特別講座…「こども造形ひろば」OB・OG参加者12名が参加、2回の講座を岡山県立大学デザイン学部棟にて開催

■この事業の成果と課題

【成果】

3回目を迎えた「こども造形ひろば」は、岡山県立大学COC+事業の受け入れにより、より地域に密着した活動へと進化した。そして、受講生の一人は「修了書なんか欲しくなかった。こんな楽しい事は終わって欲しくなかったから」とう

れしい発言があった。受講生の楽しそうな笑顔と真剣な制作の姿、他校の生徒との交流、完成した喜びは子どもたちの自信へとつながったことを実感した。

【課題】

持続可能な造形活動による感性教育にするためには、地元で活躍しているアーティストの参加や、総社南校美術部の参加要請など、地域との連携による造形活動へと積極的に声をかけていく必要がある。また、本物を鑑賞することが大切である。そこで、講師の作品鑑賞や大原美術館をはじめ高梁川流域の美術館で学芸員さんによるギャラリートーク体験講座を計画している。



協力事業

第9回高校生によるまちの匠への「聞き書き」 〜まちの記憶〜



「聞き書き」をきっかけに
地域で活動する人材育成の場へ。

2018年度は、高梁川流域を中心にした高等学校生徒有志と岡山大学の学生有志の20名が参加しました。突然の7月豪雨災害、台風上陸により研修会開催が危ぶまれましたが、担当の先生方をはじめ、関わってくださった方々のおかげで無事実施することができました。

期せずしてサブタイトルは「まちの記憶」、倉敷中央高校生3人は被災された方へ、矢掛高校生6人と岡山大学生2人は自らが話し手を決めて「聞き書き」を実施していました。

そして、今年度は高梁川流域学校の関係者との連携により、古城池高校生5人は、水島コンビナート企業OBや商店街の関係者への「聞き書き」を実施、地域の繋がりがより深まりました。また、倉敷中央高校生1人は大久保代表理事へ、矢掛高校生1人は大原美術館を退官された学芸員さんへ、岡山後楽館高校生1人は池田動物園副園長さんへ「聞き書き」を実施、地域の方が話し手を紹介してくれ、高校も積極的に活動へ参加してくれました。

それから、今年度は成果物冊子を岡山県立大学デザイン学部の野宮教授とゼミ生2人が編集をしてくれるという新たな展開もあり、地域と教育現場との連携による人材育成の場となりました。

【実施内容】

5月参加者公募

6月23日(土)「聞き書き」事前研修会

講師…澁澤寿一氏(NPO法人共存の森ネットワーク理事長)

ワークショップ…前田芳男氏(岡山大学教授)

会場…倉敷公民館 第2会議室

矢掛高校、倉敷中央高校、古城池高校、岡山後楽館高校、岡山大学、大学生有志、一般

参加など約50名が参加

7月28日(土)「聞き書き」研修会 事前研修会

振り返り&聞き書き模擬体験

振り返りワークショップ講師：前田芳男氏

文章構成ワークショップ講師：室貴由輝氏(岡山後楽館高校教頭)

会場…岡山県立大学

矢掛高校、倉敷中央高校、古城池高校、岡山後楽館高校、岡山大学、大学生有志、チーム「結」

(聞き書きOG)31名が参加

8月〜10月インタビュー実施

9月〜11月書き起こし&文章構成

12月22日(土)フォーラム開催(振り返りワークショップ&成果発表会)

振り返りワークショップ講師：室貴由輝氏

フォーラム講師…澁澤寿一氏

コメンテーター…澁澤寿一氏、堂野博之氏(飛鳥

地域おこし協力隊)

ファシリテーター…平田勉氏(備中「聞き書き」

実行委員会代表)

参加者…47名

1月〜3月成果物 作品冊子作成

■この事業の成果と課題

【効果】今までは、実行委員会が「聞き書き」の話し手を決めていたが、今年度からそれぞれの学校で話し手を決め実施した。また、話し手を要請下さる方もあり、より地域に根づいた、「聞き書き」へと進化している。そして、「聞き書き」OG

が飛鳥(笠岡市)で島民との交流活動、研修会や

フォーラムのサポートなど、「聞き書き」をきっかけに

地域で活動する人材育成の場となっている。

【課題】

活動資金の調達課題である。

語り～部会

代表者住所：〒700-804 岡山市北区中井町1-5-16
 電話：090-3365-9419
 E-mail: nadia.furukawaakira@gmail.com
 代表者：古川 明
 所属員：2名（藤原 哲男、斉藤 豊）
 年会費：なし
 設立：平成27（西暦2015）年2月

団体発足の経緯

水島で生まれ、水島コンビナート企業で働いた経験のある代表が、地元の人たちにコンビナートのことを知って貰いたいという思いに駆られるようになった頃、水島環境再生財団（公益財団法人）主催のコンビナート研修講師役に誘われ、コンビナート観光のガイド役や解説者を務めるようになったことが活動の原点。その後、高梁川流域学校（一般社団法人）の発足に伴い、水島コンビナートに関連する内容を、流域学校のプログラムに加えることが契機となって、現在に至る。

会は、コンビナート企業OB 2名と現役 1名が加わり、計 4名で開催した「コンビナート研修会」に端を発するが、現役 1名が他府県へ転出したことにより、現在は 3名で活動中。



●1960年代の水島コンビナート

主な活動

- 1：コンビナート研修【座学：水島環境学習センター】
 - ・水島コンビナートの歴史と現状
 - ・コンビナートルネッサンス
 - ・LNGの話
 - ・製油製品のできるまで
- 2：コンビナートツアー
 - ・バスツアー
 - ・クルーズ【水島港内を周回しながら、工場群を見学（夜・昼）】
- 3：教材
 - ・コンビナート建設時の歴史的写真
 - ・クルーズマップ&主要企業紹介
 - ・水島港の今むかし合成図【1947年 & 2014年】

団体発足の経緯

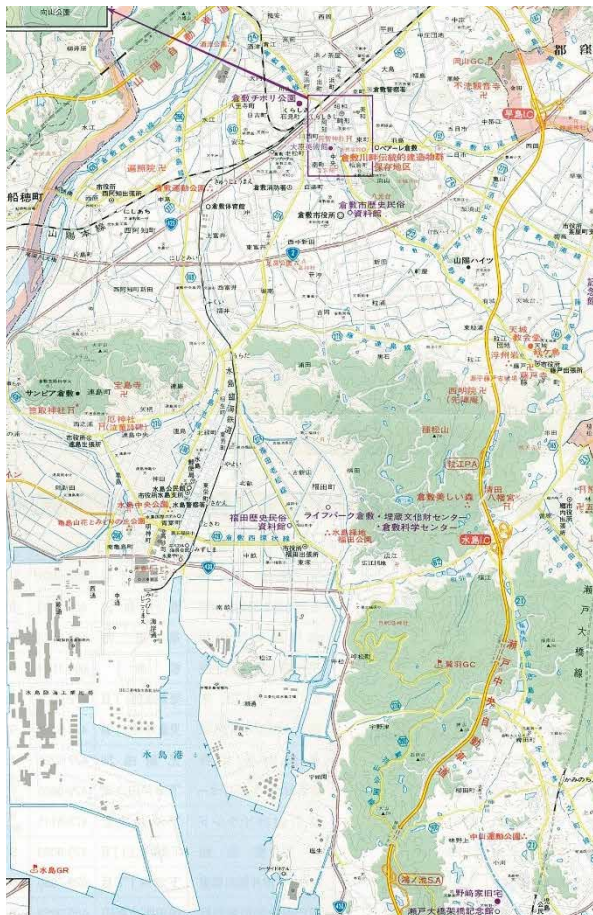
県や倉敷市の屋台骨を支える水島コンビナートの歴史と、存在の意義、包含する課題、最新技術などを広く世の中に伝えていくこと



●水島コンビナートの夜景

これからの課題など

- 1：会員全てが石油会社出身であることから、その他コンビナート企業からも人的・財政的協力を得て、講師陣の充実、後継者の育成を図りながら持続可能な体制づくりを目指すこと
- 2：安定的運営を図る目的で、これまでの一般研修に加え、行政や学校法人などを対象に定型プログラム化し財政面での自立を図っていくこと



●コンビナートツアー・ガイドマップ

NPO法人 フォレストフォーピープル岡山

団体住所：〒700-0038岡山県高梁市落合町阿部866-2 クラフルハウス2F
 電話番号：0866-56-3550
 E-mail：info@ffp-okayama.org
 URL：http://ffp-okayama.org
 理事会：理事11名（理事長 山下 武伺）
 会員数：正会員67名、内正会員42名
 年会費：正会員5,000円、賛助会員3,000円
 設立：平成18(2006)年3月

団体発足の経緯

国土の約7割にも及ぶ森林はその一部を里山として、長く我々の生活と共にあったが、昭和30年代以降、農林家の高齢化と過疎による維持管理の停滞、長期にわたる木材価格の低迷等により放置されはじめた。その結果、森林の持つ公益的機能の低下が危惧され、また、先人がこれまで培ってきた里山文化も失われはじめた。このような森林(里山)を取り巻く諸問題に対し、森林資源の復活・保全、里山文化の継承、里山林の生物多様性を活かした青少年環境教育に積極的に貢献していくことを目的に平成7年に「高梁地域美しい森づくりの会」を設立、岡山県と協働で森づくり活動をスタートした。その後、自立した運営体制を整えるため、平成18年にNPO法人として活動を開始。

団体の目的

人・自然・社会の関係性を大切に考え、それらをつなぐ人づくりを推進している。青少年を対象とした地域の伝統的な生活文化や豊かな自然を活かした体験的な学びや環境教育を通して、健全な人づくり、里山文化の継承、自然環境の保全を推進し、持続的に発展する社会の実現に努めている。

主な活動

2006：NPO法人ふれあいの里・高梁 設立
 2006～：行政との協働事業「緑と水の森林基金」「県民参加の森づくり事業」「おかやま共生の森事業」「おかやま森づくり県民基金事業」「高梁のマツ林・マツ竹再生事業」「里山ふれあいの森活動支援事業」「里山再生協働事業」「企業との協働による森づくり事業」に取り組む
 2011：法人名をNPO法人フォレストフォーピープル岡山に改称高梁美しい森を活動拠点に、森林・林業体験イベントの開催、自然観察会の開催、林産の加工、企業による森林・林業研修の受け入れ、学校教育との連携による森林環境教育等の実施に努めている。
 2014：第27回森林リノベーション地域美化活動コンクール協会会長賞(公益社団法人日本リノベーション協会)
 2014：平成26年度生き生き岡山推進賞(岡山県)2016：リポフミスト日本財団 社会ボランティア賞(公益財団法人日本リポフミスト日本財団)
 2017：企業CSR活動支援に新たに三菱ケミカル株式会社2018：ログハウスメーカー BESS との協働事業開始
 2017：企業CSR活動支援に新たに三菱ケミカル株式会社が加わり、JXTG エネルギー、タカナシ乳業、オムロン岡山工場と併せて4社となる。

2018年度活動報告

日本人が大切にしてきた伝統的な自然観を育むことを目的に下記事業を実施した。

8月 夏の備中高梁フォレストジャンボリー

参加者数 63名【環境教育事業】

水辺をテーマに、他団体協働方式によるワークショップ型体験イベントを実施。



10月 キノコ観察会(秋のフォレストジャンボリー)

参加者数 66名【環境教育事業】

キノコの基礎知識を養うと共に森の恵みを体験。12月 冬のフォレストジャンボリー

参加者数 162名【環境教育事業】

バイマスエネルギー活用体験、山野草観察会と山野草料理等の体験。

8月～2月 フォレスタースターの日(6回開催)

参加者数 71名【森林整備と森の利活用事業】山林の境界判定についての研修会及び、チェーンソーを使った間伐の実践。また、間伐材を使った炭焼きの実践や森林保全活動指導の実践を行った。



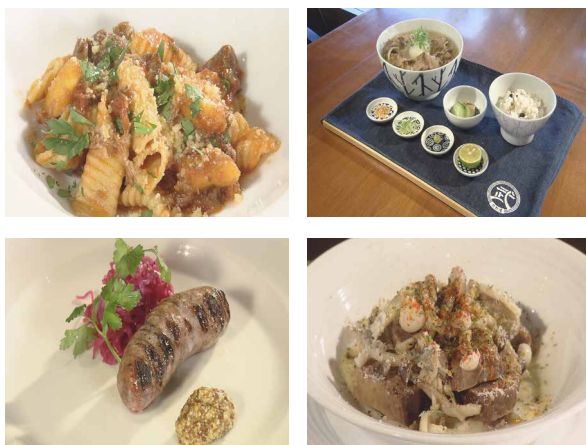
森林整備については、目標1ヘクタールに対し、2.2ヘクタールと、目標を達成できた。また、フォレストジャンボリー参加者も年々増加傾向であること、また、高梁川下流域の企業より、薪販売のための協働の申し出があったことから、里山保全活動への関心向上の手応えを感じている。

事業における課題

昨年度の課題、『「実際に行動をおこす」段階へのステップアップが非常に難しい』に対し、本年度は、実際に指導者として実践してもらえる機会を設けたことで、改善の兆しが見え始めた。しかしながら、まだまだ圧倒的に人材が不足しているのが現状であり、引き続き改善と、啓蒙活動に努めたい。また、次年度に向け、何らかの“楽しみ”や“わくわく感”が持てるような事業の組み立てを考えている。

TIN 高梁川流域情報ネットワーク

代表者住所：〒710-0803倉敷市中島2661-1
 (倉敷ケーブルテレビ内)
 電話：086-466-1717(倉敷ケーブルテレビ内)
 E-mail：sakamoto@kct.co.jp
 構成団体：高梁川流域コミュニティ・メディア8社
 及び役員 会長 坂本 万明(倉敷ケーブルテレビ顧問)
 副会長2名 幹事1名
 設立：平成27年3月3日(西暦2015年)



設立趣旨

当会は地方創生で掲げる中枢拠点都市圏構想を情報ネットワークの側面から支援するものとして、流域の歴史文化、産業、流域住民への情報伝達を行うと共に情報の共有化を図り、情報発信を行う事としています。当会は流域の「多様性の共生による自立」を理念に地域の記録係として歴史を刻み、豊かな自然の中で子育てや生活が出来る地域社会を実現することを使命としています。実施計画は以下の通りとなっています。

- ・流域を網羅した各種情報収集及びコンテンツの制作
- ・制作したコンテンツのアーカイブ化とクラウドの構築
- ・各種プラットフォーム (NET) へ載せて情報発信を行う
- ・流域内の通信環境を整備して、ブロードバンドを提供

TIN 事業活動 I

■ 2015 年度

- ①高梁川流域デジタルアーカイブス (倉敷市委託事業)
動画制作 (5分×20本)
- ②「山田方谷」コンテンツ (動画) 制作
(山田方谷の軌跡実行委員会)

■ 2016 年度

- ①高梁川流域デジタルアーカイブス (倉敷市委託事業)
動画制作 (5本×20本)
- ②「高梁川流域の企業人」(倉敷市委託事業)
動画制作

■ その他パイロット事業

- ①講演「備中志塾～備中の伝統文化の継承・発展」(全5回)
- ②「備中ジビエコンテスト」(主催:高梁川流域学校・制作:倉敷ケーブルテレビ)

WEB 動画制作 (2分×11本)

■ 2017 年度

- ①高梁川流域デジタルアーカイブ (倉敷市委託事業)
動画制作 (5分×20本)
- ②「備中ジビエコンテスト」
(主催:高梁川流域学校・制作:倉敷ケーブルテレビ)

WEB 動画制作 (2分×17本)

今回は倉敷市・岡山市・真庭市・新見市と岡山県下を対象とした猪肉のロース肉、モモ肉等及び鹿肉のジビエを和食・フレンチ・イタリアン・ドイツでこだわりの料理を提供

③高梁川流域百選 (山陽新聞社協働企画)

山陽新聞毎週朝刊連載

動画制作 (2017年4月～2018年3月)

5分～10分×33本)2018年4月以降も継続

4K及びドローン撮影編集

■ 2018 年度

- ①高梁川流域デジタルアーカイブス (倉敷市委託事業)

TIN 事業活動 II

高梁川流域 Free-WiFi 整備

当会構成各社は流域自治体から委託され同一スペック (TIN 構成のケーブルテレビ NET-AP・認証サーバー共有) にて構築すると共にメンテナンスを行っています。NTT-BP が提供する専用アプリ「Japan Connected-Free WiFi」で一度認証したら全国の主要な駅や空港、観光施設などで簡単に WiFi を使用することができ、高梁川流域 Free-WiFi においてもシームレスに繋がります。

■ 2015 年度

- ①倉敷市を起点に笠岡市・高梁市
高梁川流域の観光スポット・ゾーン対象に整備

■ 2016 年度

- ①倉敷市児島地区 (鷺羽山他)・井原市・矢掛町・総社市
各観光スッポ・ゾーン対象に整備

■ 2017 年度

- ①倉敷市玉島・倉敷市中心市街地美観地区周辺・浅口市
観光スポット・ゾーンはもとより観光客の動態エリアへの拡大



4. 地域支援



茶屋町社協との協働事業(四世代交流、子育て資源の発掘)



平成30年度 独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成モデル事業、ママぱれっと
ママと赤ちゃんの居場所、支援者向け研修



(コミュニティ食堂の立ち上げ支援)

5. 幼児向け防災教育(企業などの協働)



防災体験プログラム(2019年1月現在 80カ所3000人以上)

6. 環境学習(倉敷市委託など)



夏休み・宿題応援団

一般社団法人チカク

団体住所：〒710-1101 倉敷市茶屋町269-1植野ビル2階
 電話：080-2900-8110(代) 070-5050-7730(ひろば)
 Fax：050-3488-4116
 E-mail：ekinotikaku@gmail.com
 URL：www.ekinotikaku.com
 職員数：17名(うち常勤2名)
 代表者：代表理事 赤木美子
 設立：平成20(西暦2008)年12月

団体発足の経緯

当法人は、倉敷駅前にあった倉敷チボリ公園の公益性の一部を継承するために、閉園直前の2008年12月26日、チボリで働く女性スタッフを中心に設立されました。

発足当初の目的として、こどもの健全育成と、市民の生きがいの創出を図って市街地の活性化に寄与することを掲げ、こどもおよび一般市民に対する「ものづくり」、「本物体験」や「コミュニケーション能力の向上」、ならびに「中心市街地の活性化」と「環境の保全」のための事業と、その事業に関連する事業および情報提供を行う、としています。設立から一貫して、社会の中の大小さまざまな矛盾や不具合を批判、論評するだけでなく、当事者として身近な課題に取り組んでいきたいと私たちは考え、行動してきました。目指しているのは、乳幼児から10歳ぐらいまでのこどもとその親を含む、小さな「コミュニティ」を、さまざまな形で町なかに作り続けること。そこで、活動を通じて、自然災害が多い日本で未来を生きるこどもたちのために、「当事者意識」を持って取り組む「姿勢」の大切さを伝えていきたいと思っています。チボリで、私たちは町なかの森を育てていました。そしていま森を育てるように人を育てる「志」をもって、事業を続けていこうと思っています。



チカクの主な活動 2018-2019

1. 就園前の幼児の預かり保育事業(年間120日)



ようちえんごっこプチャぱれっと(2~4歳児のプレ幼稚園)

2. 地域子育て支援拠点事業(倉敷市委託、年間240日)



ちややっこひろば・チカク(0-3歳児と保護者の居場所)

3. 地域支援事業(地域の子育て支援団体との協働)



わらべうた(愛着関係と感覚統合の視点を持つ支援者の養成)



アラ40ママの子育てひろば(40代ママの育児不安解消、ピアサポート)

NPO 法人倉敷町家トラスト

団体住所：〒710-0053 岡山県倉敷市東町1-21
 電話：080-5232-6462
 E-mail：info@kurashiki-machiya-trust.jp
 URL：http://kurashiki-machiya-trust.jp
 理事会：理事12名（代表理事・中村 泰典）毎月1回
 会員数：会員276名、内正会員55名
 年会費：正会員5000円、賛助・準会員2000円
 設立：平成18(2006)年5月(10月NPO法人認証)

団体発足の経緯

昭和24年に民間団体「倉敷都市美協会」が設立され、戦後の倉敷の景観保全運動が倉敷川畔からはじまる。市は「倉敷市伝統美観保存条例」を制定し、昭和54年に「重要伝統的建造物群保存地区」(13.5ha その後平成10年に15haに拡大)として国の選定を受ける。平成2年には全国にさがりかけて背景保全条例を制定したが、住民団体の活動は消極的になり個人の保全に任せていた。平成18年、目立ち始めた空き家の改修と利活用を進めるためNPO法人として団体を設立した。

団体発足の目的

倉敷川畔重要伝統的建造物群保存地区及び周辺の未利用町家の再生・利活用を目的に、町家調査研究・町家生活体験・滞在・定住促進・地域活動、地域文化の継承を進めている。

活動

1949年に民間団体「倉敷都市美協会」が発足し、景観保存運動が倉敷川畔からはじまる。市は「倉敷市伝統美観保存条例」を制定し、1979年に「重要伝統的建造物群保存地区」として国の選定を受ける。

2006年、空き家の改修と利活用を進めるためNPO法人として団体を設立。2007年に町家再生第一号として「御坂の家」竣工、活動資金を得るため滞在施設として運営、収益を上げている。いわゆるゲストハウスとしての先駆けになった。「まちにあかりを灯す」がキーワード！・来訪者があかりを灯す（滞在・交流）・暮らしのあかりを灯す（定住）・商店・事業所があかりを灯す（経済活動）・門灯・看板のあかりを灯す（新しい公共空間）・伝統行事であかりを灯す（文化継承）・イベントであかりを灯す（賑わい・交流）・エコなあかりを灯す（環境配慮）・祈りの明かりを灯す（東日本支援事業）。今年度は倉敷市中心市街地の町家調査を実施。

現在17軒の町家を再生に関わり活用を進め、数多くのイベントを主催している。

2011年には第一回地域再生大賞「準大賞」、2013年日本ユネスコ協会連盟「プロジェクト未来遺産」選定登録。2014年、備中町並みネットワーク設立、備中町並みゼミを毎年開催、岡山県西部、備中地区の5市1町の町並み保全団体と自治体が参

加するネットワークになり岡山県西部地区の町並み保全の機運が今まで以上に高まっている。2018年2月には第7回全国町家再生交流会を開催した。2014年から「備中no町家deクラス」を開催、2018年は「町家deクラス2018」として開催地を全県に広げて実施した。地域の暮らし文化の継承を目的にソフト事業にも力を入れ、行政との協働事業として評価が高い。

課題

重伝建地区の保存は条例規制と補助金で効果が上がり、官民が活動を進めた結果、観光商業モール化し、来訪者が押し寄せ、交通など生活にかかわる諸問題に地元住民の不安が高まっている。一方、隣接地区では建築物の様式や素材の統一感はなく、プレハブ建築物やマンションが建ち並び、駐車場が増え、景観は無秩序な様相を呈し、景観のローカルルールの策定が急がれる。倉敷中心市街地では都市の機能及びコミュニティの再生・再編が求められており、仕組みの構築、実践が急がれる。



事務所



御坂の家（玄関）



パンフレット表紙



香りを楽しむ会



海を見ながらのCafe

一般社団法人高梁川プレゼンターレ

団体住所：〒710-0046 岡山県倉敷市中央2丁目13-3住吉町の家分福
 電話：086-527-6248
 E-mail：t.presentare@gmail.com
 WEB：https://www.facebook.com/t.presentare/
 代表理事：坂ノ上博史
 役員：中村泰典、石原達也
 設立：2012年4月
 従業員：6名

- ・商店街組合実態調査（岡山県中小企業団体中央会 / 委託事業）
- ・高梁川流域ソーシャルビジネス支援センター業務（倉敷市 / 委託事業）
- ・学生未来プランコンテスト「Koduti」（一般社団法人高梁川流域学校 / 委託事業）
- ・倉敷市ソーシャルビジネス推進事業（倉敷市 / 委託事業）

団体の目的

この法人は、高梁川と瀬戸内海、そして中国山地との囲まれた、高梁川流域（備中地域7市3町）に生きる私たちが連携して生み出す、ここにしかない特徴を生かした自律的で持続的な地域社会の創生を目指して、地域活性化と雇用創出のための新しいビジネスとプロジェクト（人、モノ、資源、情報）を、まるでショーケースに並ぶキラキラした価値ある宝物のように、その魅力を広く皆様にお伝えするとともに、そのプロジェクトの価値と魅力と信頼を高めるための支援の活動を行うことを目的とする。

主な活動実績

- ・「住吉町の家分福」運営事業（自主事業）
- ・倉敷市水島地区航空宇宙産業クラスター研究会(MASC)事務局業務（同研究会 / 委託事業）
- ・ふるさとテレワーク推進事業（総務省 / 補助事業）
- ・テレワークで紡ぐデータキャピタル事業（倉敷市 / 委託事業）



備中「聞き書き」実行委員会

団体住所：〒719-1126 岡山県総社市総社2-15-28
 電話：070-5670-7874
 E-mail：kibikobo.yui@gmail.com
 URL：https://www.facebook.com/kikakakiokayama/
 実行委員：12名
 代表者：代表 平田 勉
 設立：平成22年4月



6月23日(土)聞き書き研修会

団体の経緯

平成22年度笠岡市市民提案型協働事業に採択され笠岡の高校生有志を公募、人材育成事業として実行委員会を立ち上げ、現在は高梁川流域の高校を中心に実施。

団体の目的

高校生が人生の先輩を訪ね、お話を「聞き」話しことばだけで文章にまとめます。

自然の成長量の中で、持続的に暮らしていた石油に依存する生活になる以前の暮らしの知恵を聞き、伝えていくというのが聞き書きの意義です。

そして、「地域で暮らす匠（人生の先輩）」の人生を記録する中から、高校生・大学生は多くの価値を学び、共有する世代を超えたネットワークから、持続可能な未来へと『世代をつなぐ』『地域をつなぐ』『歴史をつなぐ』活動を生み出すことを目的としています。



聞き書き実施

主な活動

- ・平成23年度から平成26年度 岡山県備中県民局協働提案事業に採択され備中地域の高校生有志により実施
- ・平成25年度岡山県生き活き岡山推進賞を受賞
- ・平成27年度岡山県多様な主体による地域支援事業に採択され実施
- ・平成28年度度海洋教育パイオニアスクールプログラムに採択され備中地域の高校生、県内大学生有志により実施
- ・平成29年度海洋教育パイオニアスクールプログラムに笠岡工業高校・矢掛高校・岡山後楽館高校・真庭高校が申請、採択され県内高校生及び大学生有志により実施。また、OB・OGの地域活動と人材育成を目的とする仕組みづくりのため、実行委員会「結」を立ち上げ離島センターの助成事業に採択され、笠岡諸島飛島にて実施。
- ・平成30年度は矢掛高校、倉敷中央高校、古城池高校、岡山後楽館高校有志と、岡山大学は授業の一環として参加して実施。

(SDGs ④⑧⑩⑫)



聞き書きフォーラム

一般社団法人水辺のユニオン

団体住所：〒710-0055 倉敷市阿知3丁目5-5
 電話：086-434-8400
 FAX：086-441-1228
 E-mail：okanoc@gmail.com
 URL：http://www.w-union.jp/
 理事会：理事10名 監事1名
 代表者：代表理事 岡野 智博
 会員数：正会員20名、賛助会員2名
 年会費：正会員10,000円、賛助会員10,000円
 設立：平成22年（西暦2010）年1月26日

団体発足の経緯

2007年度倉敷商工会議所を中心とした産学官連携組織が経済産業省「広域・総合観光集客サービス支援事業」に採択され、高梁川流域の「鉄の径」「酒蔵めぐり」観光など広域観光ルートの開発を行った。2008年からは高梁川学校を立ち上げ、単なるテーマ観光から着地型観光への展開を図り、その実現のため人材の育成と経営的に自立した継続的な事業体の構築を目的とした。その成果をもとに、2010年1月に観光産業だけでなく流域の活性化とQOL向上を目的として、高梁川流域の「水」でつながる個人・団体からなる流域連携を実践する当法人を設立した。

団体の目的

高梁川流域の豊かで多様な資源を活用した地域活性化事業を通して、地域経済の振興に寄与するとともに、地域生活の質の向上を図ることを目的とした事業を行う。

主な活動

【着地型観光・集客イベント企画】

- H23年度「籠の仕事展」(岡山県備中県民局)
- H23～H27年度「文化遺産を活用した観光振興・地域活性化事業」(文化庁)重要文化財大橋家住宅の活用
- H23年度～「高梁川マルシェ」(地域文化フェスティバル)
- H27年～H29年度～ 高梁川トレイルによる風土ツーリズム開発(岡山県備中県民局協働事業)
- H26年～H28年度 SAVE JAPANプロジェクト(希少種生物の保護活動)
- H28年～ 備中ジビエ料理コンテスト主催
- H29年4月～「倉敷中島屋」運営

【地域商品の開発・流通販売】

- H22年度「ICT雇用創造ふるさと絆プロジェクト」(総務省)新見道の駅ネットショップ構築
- H23年度「地域力新事業∞全国展開事業」(中小企業庁)
- H25年度 摘果した清水白桃ピクルス開発
- H27年度 シシ肉缶詰「コン猪」開発
- H28年度 備中ジビエ料理コンテストを主催

【地域産業人材の育成】

- H22～25年度から「就業力育成支援事業」(文部科学省)
- H24年度 GREEN DAYS COLLEGE 事業(岡山県備中県民局)

H25～26年度 備中志塾(文化庁)

【森林間伐活動と循環型エネルギー事業】

H22～26年度から新見神郷「環境保全型森林間伐ボランティア事業」(おかやま森づくり県民基金+緑の基金)

H28年度 高梁成羽森林間伐(森づくりサポート事業)



●高梁川マルシェ (国指定重要文化財大橋家住宅)



●高梁川トレイル (高梁市成羽魚荷道)



●コン猪 (シシ肉の塩漬け) の開発

これからの課題など

- (1) これまで実施してきた活動やプログラムを磨き上げて、協働する仲間を増やして、魅力化・商品化すること。
- (2) 高梁川流域学校の学びのプログラムの中で、位置づけを明確化して体系的に学ぶ仕組みを作ること。
- (3) 組織基盤の強化と経営的な自立を図ること。補助金の依存しない収益と協働の仕組みを構築する。

そうじゃ ぼっけえ造形の会

団体住所：〒719-1126 岡山県総社市総社 2-15-28
 電話：070-5670-7874 (事務局 森光)
 E-mail：kibikobo.yui@gmail.com
 WEB：https://www.facebook.com/soujyazoukeinokai/
 会員：11名
 代表者：布下 満
 設立：平成24年1月1日



団体の経緯

こども造形ひろばは、2016年(第1回)に始まりました。それより前、総社の地で全国造形フォーラムが開催され、スタッフ一同の熱意を寄せ合って大きな成果を上げました。この時、播かれた貴重な種を大きく育ててゆかねばと「そうじゃ ぼっけえ 造形の会」を立ち上げました。それから2年、じっくりと活動案を練り、こども造形ひろばがスタートしました。



開講式

団体の目的

今、学校は全国学力調査の結果が重視され、「脱ゆとり教育」に舵を取り、大きく様変わりしています。

目に見えず、数字として表れない「感性」「情操」を醸成していく教育の大切さは語られることが少なくなりました。心の教育の中心をなす「造形」「図画工作」「美術」「芸術」に関わる授業時間は削減・縮小の方向に進んでいます。そこで、地域で活躍するアーティストと造形教育関係者が力を合わせ、こどもの豊かな心、豊かな情操を育む場をつくりました。それが「こども造形ひろば」です。



講座のようす

主な活動

- ・2014年9月27日(土) 28日(日)
 地域で咲かすいのちのちから～全国造形フォーラム in 総社～を開催(会場:総社市立常盤小学校・常盤幼稚園)全国から約300名が参加。
- ・2016年度第1回こども造形ひろばを総社市立常盤小学校にて開催、30名が受講。
- ・2017年度第2回こども造形ひろばを総社市立常盤小学校にて開催、30名が受講。特別講座を雪舟窯にて開催、10名が受講。
- ・2018年度公益財団法人総社市文化振興財団文化事業、一般社団法人高梁川流域学校の連携事業として、第3回こども造形ひろばを総社市立常盤小学にて開催、38名が受講。特別講座を岡山県立大学にて開催、13名が受講。

(SDGs 4)



展覧会

公益財団法人 水島地域環境再生財団(みずしま財団)

団体住所：〒712-8034 岡山県倉敷市水島西栄町13-23
 電話：086-440-0121
 E-mail：webmaster@mizushima-f.or.jp
 URL：http://www.mizushima-f.or.jp/
 理事会：理事9名(理事長：石田正也)
 賛助会：個人117名、団体23団体、法人17法人(2018
 員数： /3/13時点)
 年会費：個人1,000円/口 3口から、団体10,000円/口
 年会費：1口から、法人10,000円/口 2口から
 設立：2000(平成12)年3月(2011年11月公益財団
 設立 法人に移行)

団体発足の経緯

岡山県倉敷市水島地域では、1983年に提訴された倉敷大気汚染公害裁判が、13年の係争を経て、1996年12月、和解が成立しました。和解の中で「水島地域の生活環境の改善のために解決金が使われる」ことに両者が合意しました。和解金の一部を基金に、みずしま財団が2000年3月、住民を主体に、行政・企業など水島地域の様々な関係者と専門家が協働する拠点として発足しました。

団体の目的

水島の経験や活動を広く全国や世界各地と情報交換することにより、岡山県内において将来の世代が安心して暮らせる環境を保全創出することを目的としています。

主な活動

活動を通じて、新しい環境文化を創出し、「豊かな地域社会」に貢献することが求められています。1999年の財団設立準備会時代から、地域の中心を流れる八間川で子どもたちと一緒に生きもの調査を始めました。財団発足後の動きを紹介します。

- 2000年3月 岡山県許可の財団法人として発足
- 備讃瀬戸海域を中心とした海底ゴミの実態把握調査開始
- 2010年6月 「第1回いきものにぎわい市民活動大賞 富士フィルム・グリーンファンド活動奨励賞」を受賞、(財)日本ソロプチミスト日本財団 環境貢献賞を受賞
- 7月 日本水大賞 審査部会特別賞を受賞
- 2011年11月 公益財団法人に移行
- 2013年8月 環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会を発足
- 2016年12月 シンポジウム「世界一の環境学習のまち・水島を目指して」開催
- 現在中心的に取り組んでいる、「協働による学びを通じた地域づくり」の活動をご紹介します。

協働取組による学びを通じた地域づくり

水島地域における様々な主体が協働した地域づくりの取組として、2013年8月に「環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会」を立ち上げ、「新しい学びのしくみづくり」の提案を行い、3つのワーキンググループで具体的に取り組んでいます。



1) 環境学習推進ワーキンググループ



大学教員、NPO、企業OB等がメンバーとなり、水島の資源を活かしたプログラムの検討や、解説のできる人材育成などに取り組んでいます。中学生向けの教材として環境学習リーフレット「みずしまの環境学習へようこそ」を作成し、活用しています。2017年度には、地域住民の方向けに水島学講座(教材づくり挑戦編)を開催しました

2) 企業市民ワーキンググループ



企業と地域との関係性づくりに取り組んでいます。水島コンビナート企業のCSR(企業の社会的責任)に関するアンケート調査、「企業のCSRを学ぶ勉強会」を開催しています。また子どもたちが参加できるものとして「水島コンビナートをもっと知ろう!環境学習ツアー」、「みずしまエコクルーズ」を企業の方の協力を得て実施しました。

3) 地域交流ワーキンググループ



地域に住む人々が地域を知ること、地域への誇りと愛着を育むこと、そして地域内外との交流を目的としています。水島を知り、学びを支える人材育成を目的とした「水島学講座(歴史編)」では、古代の水島や新田開発・コンビナート開発の歴史を学びましたが、毎回好評でした。実際に現地を巡る「バイクピズ・みずしま」イベントも行っています。

これからの課題など

水島での“新しい学びのしくみ”による地域づくりの取組をいかにして持続させていくかが課題です。そのために、水島での学びのプログラムを充実させることや、滞在しながら長期間で地域で学ぶことのできる体制など、協働で実施していきたいと考えています。

備中邦楽の里フェスタ実行委員会

団体住所：〒710-0046 岡山県倉敷市中央2丁目13-3住吉町の家分福
 電話：080-4629-6624（代表携帯電話）
 E-mail：b.hougaku@gmail.com
 WEB：https://www.facebook.com/b.hougaku/
 代表理事：坂ノ上博史
 構成員：116名
 設立：2015年1月1日



●備中邦楽の里フェスタ in 倉敷

団体の目的

本実行委員会は、和楽器を使った和の音楽文化を活かした地域活性化事業、ならびに関連する事業を行うことを主な目的とする。2 文化振興及び観光客誘致の観点から、倉敷市文化振興基本計画（平成22年策定）に即して、「倉敷川畔伝統的建造物群保存地区」をはじめ、下津井地区、玉島地区の町並み保存地区を中心とした歴史的地域を文化遺産として定義し、当該地域において、イベント及びワークショップ及び関連事業を実施する。3 和楽器アーティストの社会貢献の観点から、備中地域における社会課題・地域課題の解決に資する事業を、和楽器アーティストとの連携によって、実施する。4 備中地域における和楽器アーティスト及び関連業種・業態における雇用の創出に資する事業を実施する。

主な活動

- ・聴覚障害者のための和太鼓体験事業（倉敷市/補助事業）
- ・備中邦楽の里フェスタ in 倉敷（自主事業、文化庁/補助事業）
- ・倉敷市文化遺産を活かした地域活性化事業（文化庁/補助事業）
- ・和楽器を活用した流域総合魅力発信事業（高梁川流域観光振興協議会/補助事業）
- ・備中邦楽調査事業（岡山県備中県民局/補助事業）



●聴覚障害者の和太鼓ワークショップ

高梁川流域学校「111人委員会」募集趣意書

平成30年1月5日

(一社)高梁川流域学校 代表理事 大久保憲作

大原總一郎氏の高い理想を基に高梁川流域連盟が設立されて61年目、岡山県美星町出身の民俗学者神崎宣武先生を校長に迎え、高梁川流域学校が開校しました。平成27年6月のことです。

神崎校長がいつも言われていること。

風土が文化を育んできたのです。風土は自然環境といいかえることができます。文化とは、そこでの暮らし方のクセのようなものと言い換えてもよいでしょう。私たちは、高梁川流域の風土、歴史や文化を学び、大事に次の世代に伝えなければならないのです。

高梁川流域学校は、地域からの「学び」をキーワードに流域各地で運動や行事を企画し実施して参りました。国や岡山県、倉敷市など高梁川流域連盟に所属する7市3町の市町はもとより、流域内外の心ある企業や団体そして大勢の個人に支えられ今に至っています。

どうすれば持続可能な運動として自立できるのか。暗中模索の3年でした。志を持つ人がいて、その人々の志が、やがて地域の未来をかたち創ると信じています。そういう人々を生み出す仕組みのひとつが高梁川流域学校であれば望外の喜びです。

その為には志をもつ人々を周りで見守り支援する方々が必要です。

「111人委員会」とはそのような個人が集まった組織です。

高梁川流域は今もそして未来も、人として真に豊かな暮らしが実現できる場所だという思いを共有し、その方々と共に目指していきたいのです。

「111人委員会」の名称の由来

新見市花見山の源流から滔々と流れ、倉敷市の水島灘に至り瀬戸内海に注ぐ母なる川高梁川の総延長111キロメートルに因んでいます。

委員は総勢111人、高梁川流域学校の理念に賛同し、行事に参加する支援者であると同時に、厳しいご意見番であって欲しいと考えています。

寄付金・助成金のお礼

平成30年度、下記の皆さまには当団体の活動にご理解いただき、多大なる寄付金、助成金を頂きました。ここにそのご厚意に対し深く感謝の意を表します。

皆さまのご期待に応えるよう、高梁川流域学校の関係者一同は、益々精進していくつもりでおります。今後ともご指導よろしくお願いいたします。

玉島信用金庫 様
吉備信用金庫 様
水島信用金庫 様
備北信用金庫 様
高梁川流域連盟 様



組織概要

校長	神崎 宣武	(民俗学者 旅の文化研究所所長)
顧問	澁澤 寿一	(認定特定非営利活動法人共存の森ネットワーク 理事長)
顧問	川嶋 直	(公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長)
顧問	大社 充	(特定非営利活動法人グローバルキャンパス 理事長)
顧問	山田 俊行	(トヨタ白川郷自然学校 学校長)
顧問	梶谷 俊介	(岡山トヨタ株式会社 代表取締役社長)
顧問	吉澤 保幸	(一般社団法人低炭素社会促進協会 代表理事)
代表理事	大久保 憲作	(倉敷木材株式会社 代表取締役会長)
理事	森 光 康恵	(きび工房「結」 主宰)
理事	赤木 美子	(一般社団法人チカク 代表理事)
理事	中村 泰典	(特定非営利活動法人倉敷町家トラスト 代表理事)
理事	山下 武伺	(特定非営利活動法人フォレストフォーピープル岡山 理事長)
理事	坂ノ上 博史	(一般社団法人高梁川プレゼンターレ 代表理事)
理事	古川 明	(水島家守舎 Nadia Local Adviser)
理事・事務局長	岡野 智博	(一般社団法人水辺のユニオン 代表理事)
監事	塩飽 敏史	(公益財団法人水島地域環境再生財団 研究員)

高梁川流域学校「111人委員会」を募集しています

委員へのご入会・ご寄附のお願い

私達の活動の趣旨に賛同し、支えて下さる賛助会員様、団体・個人の方からのご寄附を募集しています。ぜひ委員として、優れた地域教育プログラムを次世代につなぐ高梁川流域学校を応援してください。

事務局あてにお名前・ご住所 / 連絡先をお知らせいただければ、入会申込書をお送りいたします。

高梁川流域学校 事務局

住所	〒710-0055 倉敷市阿知3丁目5-5
電話番号	090-4800-1110
FAX	050-3588-6427
メールアドレス	takahashi.river1506@gmail.com
ウェブページ	http://liten.jp



高梁川流域学校

一般社団法人 高梁川流域学校

【事務局】〒710-0055 倉敷市阿知3丁目5-5

TEL : 090-4800-1110 FAX : 050-3588-6427

E-MAIL : takahashi.river1506@gmail.com WEB : <http://liton.jp>